
竜の詩

lyuvan

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の詩

【Nコード】

N1309X

【作者名】

lyuv an

【あらすじ】

教団に両親を殺された竜の復讐物語

事と次第によってはpixivでも投稿するかもしれません。

始まりの悪夢 その一（前書き）

こちらでは、初投稿

短いし不定期だし駄文だしと悪いところが多い作者ですがよろしく
お願いします。

始まりの悪夢 その一

始まりの悪夢 その一

こんな夢を見た。

幸せの終わったあの日の夢

独りになったあの日の夢

そして、復讐を誓ったあの日の……。

あの日の事は今も憶えている。

何時ものように、朝早くから村の近くにある川で魚を取っていた。この頃は、「人型」ではなく、竜の姿で過ごしていた。

竜といっても、赤い鱗をした小ぶりな西洋竜で、村の人に抱きかかえられる位の大きさだった。

懐かしんでいると、「僕」が川から上がってきた。

川辺に置いてあった、魚を入れたカゴを掴み文字通り「飛んで帰る」。

子供でも竜、力持ちだった。

一瞬、暗転が入り場面が、村に変わる。

村には様々な「人」がいた。

獣が二足歩行した様な人。

爬虫類が二足歩行した様な人。

鳥類が二足歩行した様な人。

そして、一部を除いて毛が無い人。

思えば、少し前から異変はあった。

「毛無し」と他の人達の間で争いが多くなっていた。

あの頃にはすでに、「教え」が伝わっていたのだろう。

そんな事も知らずに「僕」は村の人に挨拶をしながら、山にある家に帰っていった。

始まりの悪夢 その二

暗転、そして場面は洞窟にうつる。

山腹にある開けた空間、目の前には別れ道がありそれぞれ、母の居る湖と父の居る宝物庫に繋がっている。

「僕」が鳴き声を発すると奥から「二人」がやって来た。

母は東洋龍の姿をした人で、父は西洋竜の姿をした人だ。

本来の姿だとこの空間に入り切らないので、「人型」をとっている。

毎日、こうして「二人」と「一匹」で魚を分けて食べていた。

カゴの中には十匹の魚が入っていたはずだ。

父と母に三匹づつ、「僕」が四匹。

父は口の中で魚を焼いてから丸呑みに、母は生のまま丸呑みに、

「僕」は、細かく噛みちぎりながら食べる。

食事を終えると、母は湖に帰ってゆく。

父は、「僕」に竜の力の使い方と知恵を教える。

真剣に聴いている「僕」の隣で「俺」は父をみる。

あの日は、竜の泪について教えられた。

家督を継ぐ者が両親から受け取る力の塊。

血や脂だけでも不死身になれるのだから、その力は推して知るべしだろう。

ただ、一人前と認められなければ意味は無いが。

座学の次は実技訓練、外に出て高く飛ぶ訓練や、火を吐く訓練を日が暮れるまで行った。

そして夜、母の湖で寝物語を聞きながら眠りについた。

何時もならば……。

洞窟に音が響く。

剣戟と罵声と咆哮と、様々な音。

一体何が起きたのか、理解できない「僕」は、音の方へと進む。
何が起きたのか、知っている「俺」は、目を閉じた。

目を開くと場面は、開けた場所に変わっている。

そこに居るのは、松明と武器を持った「毛無し」達。

そして、傷だらけになって横たわった父の遺体。

「僕」は、目の前の光景が信じられないのか呆然としていた。

そんな「僕」を見て近づいてくる「毛無し」達。その口からは、
「売る」や「調教する」等の言葉が漏れる。

「僕」は、怖くなって湖に逃げ出した。

それを見て「俺」は、「毛無し」達の前に立ちはだかるも所詮夢、
「俺」の身体を通り抜けて「毛無し」は奥へと進んでいった。

聞こえてくる母の断末魔。

「俺」は、己の無力を嘆きながら夢から覚めた。

旅立ちの日

あの日、母から泪を受け取り

湖底に母が開けた穴から川へと抜けてそのまま海へとながされた。

気がつけば、島国に流れつき

そこに住んでいる龍の世話になった。

それから十年、龍から生きていく為に必要な知識と力の使い方を教わり。

ロキという、手品師から資金稼ぎの術としての手品と、旅に必要な事を教わった。

そして今日、十六になる俺は一人前とみなされる。

もう、準備は出来ている。

「毛無し」が両親を殺した理由も分かっている。

後はもう旅立つのみ。

世話になった龍には、昨日の内に挨拶はすませた。

できればロキ師匠にも挨拶をしておきたかったが、留守だった。

元服の後に、もう一度いつてみることにしよう。会えなければ、諦めよう。

身支度を済ませ、そう考えた。

一応、晴れ舞台なので姿見で入念に確認する。

映るのは、竜人。

赤い鱗は、光沢を持ち健康的である。

角も滑らかでヒビ一つ入っていない。

服は、おろしたてだ。

「大丈夫そうだな」

確認を終え、いままで世話になった家をでる。

もう、戻ることも無いだろう。

旅立ちの日 昼

元服、一人前の存在になった事を祝う儀式。

そして、龍や竜にとつては、泪を受け継ぐ儀式でもある。

通常ならば、両親から祝詞を受ける事で一人前として認められ泪を飲み込む事で終了するのだが。

「やはり、駄目だったか」

黄色の鱗をした龍人の翁が呟いた。

「育ての親なんぞでは無く、泪自体に認められなければならぬようじゃ」

翁はふう、と溜息をつき俺に告げた。

「母さんは、俺を認めてはくれないのだな」

少し俯き呟いた俺に翁は言う。

「当たり前じゃ、復讐なんぞに囚われおつて。そんなことだから何時までも、邪炎しか吐けんのじゃ」

分かつてはいる。復讐を母が喜ばないことも、父のような完全な炎が吐けないことも。

悔しくて齒を食いしばる。

「分かつてはいるようじゃな」

「ああ、分かつているとも」

翁の目を射抜くように睨む。

分かつていても、諦めることは出来ない。

そんな決意を伝えるために。

「……しようながあるまい、好きにすればよかろう。儂はもう知らん」

そう言つて、翁は背を向けた。

「いままで、世話になった」

その背に礼を言い、立ち去ろうとした。

「そういえば、主の母は水龍であつたな」
足を止める。

「陽である男が陰である水を呑むには、女心を知るのが近道かもしれないな」

翁の独白が終わった。

「恩にきる」

今度は、立ち止まることもなく歩いた。

残された翁は一人愚痴をこぼす。

「小僧が、己のことを二の次にしておつてからに。」

「頼むからこの翁より先に死ぬなよ」

旅立ちの日 夕方 その一

元服を不完全ながら終え、今は恩師ロキの下に向かうために村を歩いている。

旅芸人であった彼のことで、もしかすれば女心を知っているかもしれない。

ただ、留守の可能性もある。
居るといいのだが。

「おや、坊やじゃないか」
声をかけられた。向いて見ると。

「二日振りだね」
「そうですね、師匠」

恩師ロキが居た。
手には何かを包んだ風呂敷を持っている。

「今、知り合いが来ていてね」
「丁度、君のことを紹介しようと思っていたところだ」

付いて来たまえ、と言ってロキは進んでいった。
用がある以上、付いていくしかない。

溜息を一つ吐き、師の後を追った。

「お待たせ、いま帰ったよ」

「お邪魔します」
師に次いで家に入る。

「あつ、これ持って客間に行ってくれ」
師は俺に風呂敷を渡すと外に行ってしまった。

仕方がないので土間で履物を脱ぎ、客間に向かう。

師匠会心の庭が眺める客間、襖を開くと、そこには簀巻きにされた灰色の狼男とそれを眺める麒麟の少女が居た。

二人がこちらを見る。

俺は風呂敷を置いて、部屋の座布団を一つ敷き、そこに座る。誰も喋らない。

特にする事も無いので、二人を見る。

簀巻きにされている狼男はどうやら口吻も縛られているようだ。何かを訴えるような目でこちらを見ているが、俺にはわからない。麒麟の少女は、本当にただこちらを見ているだけだ。

焦点は合っているが興味は無い、と言わんばかりの瞳を向けている。

これ以上、得る物は無さそうなので庭を眺めると。

「あつ、見つかつちゃった」

師匠がいた。

「バレちゃ、しょうがないや」

そう言つて、庭から客間に上がる師匠。

「それじゃあ、紹介するね」

こちらに掌を返して向け「彼が竜牙君」

そして、あちらに掌を返して向けて「簀巻きになつてゐる彼は狼牙君。麒麟の彼女は麟ちゃん」と紹介した。

「大主 竜牙です。師がいつもお世話になってます」
そう挨拶をする。

「ところで、竜牙君。気になる事は無い？」

師が問いかける、しかし。

「いえ、特にはありません」

「……簀巻きになつてゐる彼を見ても？」

「何か狼藉を働いたから、こうなつたのでは」

一瞬、男いや狼牙のショックを受けたように尻尾が立ったが、まさか。

師を見ると、高々と看板を掲げていた。

書かれている文字は。

「ドッキリ、大成功！」

確認と同時に俺は狼牙を簀巻きから解放した。

「大丈夫か」

抱き起こし、口吻の紐を外して問う。

「うう、何とか……」

酷く憔悴しているようだが命に別条はなさそうだ。

「いや、手品や戦い、旅の仕方は及第点だけど、悪戯に関して
は落第だね」

僕も甘いなあ、と師はぼやく。

「あんな悪質な物は、悪戯の範疇にあるわけがない」
文句を垂れると。

「残念、僕の故郷じゃ範疇です」

返され、埒が明かない。

俺は、今日中に旅に出れるのだろうか？
思いもよらない騒動に頭をなやませた。

旅立ちの日 夕方 その二（前書き）

これから、視点変更があります。

行間が多く空いたら視点が変わったものとして下さい。

旅立ちの日　夕方　その二

このままでは、埒が明かない。

師の悪戯好きとストッパーのいないこの状況では狼牙と共に弄ばれる。

過去の修行と称した悪戯とその加減の無さから確信する。

今を除いて話をする機会はない。

「師匠、少しお聞きしたい事があるのですが」

壁に看板を立てかけている師に、はなしかける。

「うん、何かな？」

「女心を知るには、どうすればよいのでしょうか？」

抱えられていた狼牙が吹き出した。

「汚いじゃないか」

「すみません、ですが何故女心を知りたいのですか？」

「ああ、そこからか」

事情が分からなければ確かに可笑しな発言だ。

「それじゃあ、事情をつてオイ師匠は何処に」

何時の間にか師が客間から居なくなっていた。

「多分、女心を知るための道具を取りにいったんでしょね」

衣装とか化粧とか、狼牙が予想を言う。

「ご愁傷さまです」

「大丈夫、君の分もあるから」

俺に慰めの言葉を投げかける狼牙に突然後ろに現れた師が絶望の言葉を贈る。

勿論、手には女物の着物と化粧箱を持っている。

「師匠、説明不足だった。俺の事情を聞いてくれないか？」

「ああ、お母さんの泪が馴染まない事でしょ。知ってるから別にしないでいいよ」

そう言つて、こちらに詰め寄る師。

「なら、こんな事をする必要は無いだろう」

「必要があるからするんじゃない。したいからするんだ!」

衣装を差し出す師、それを手に取るのを渋る俺の肩に狼牙が手を置いた。

「諦めましょう。こうなったら手を付けられません。お急ぎの様ですし、さつさと済ませるが吉です」

私も手伝いますから、そう言つと狼牙は衣装を一つ手に取り客間を出た。

「これを着るのか」

持っているのは、黒い浴衣に牡丹が描かれた女物。

確かに赤い鱗は映えるだろうが……。

「厳つい、俺の顔じゃあな」

まあ、気にしてもしょうがあるまい。

さつさと着替えを済ませるか。

「うう、どうして毎回こうなるんでしょうか」

ロキさんに関わると碌な事にならない。

ああ、過去に戻るならあの時の私を殴りたい。

あの時、協力して貰うために何でも言う事を聞くといい約束をした私を。

「まあ、随分と助かりましたけど」

まさか、こんな事を頼まれるだなんて。

「不確定が現れた。その退治を手伝えなんて」

この世界に現れる筈の無かった教団。

その教祖と黒幕の調査及び撃退、それが頼まれ事。

そして、その鍵を握るのが……。

「彼、大主 竜牙」

本来なら、二十まで親元で育てられ、その後両親の泪を受け継ぎ世界を回る。両親の過去を知り、対立していた竜と龍の架け橋として尽力したり様々な種族間の対立を解決していき最後には統一。

そして……。

「千年王国を造る」

理想的な世界として創られた。

しかし、不確定によって妨げられた。

「この世界外からの介入である不確定。一体誰がなんの目的で」
「思案しても何も浮かばない。」

赤い色に桜の模様をした浴衣を着た私は、客間に戻ることにした。

「おい、これで良いのか」

「うん、とても似合ってるよ」

不機嫌そうな声をする竜牙君に僕は褒め言葉を贈る。

恥ずかしさからか睨んできた。

まあ、そんなところが弄りがいがあるんだけどね。

竜牙君をからかっていると、再び襖が開く音がした。

「これで宜しいでしょうか」

「うん、とても似合ってるよ」

ありがとうございます、と言って口元を隠して笑う狼牙君。

白に限りなく近いグレーの毛、長い鬘は後ろで軽く縛り一つに纏めて垂らしてある。彼自身が醸し出す空気も柔らかくなんと言うか。

「お母さん？」

近くにいた麟が言う。

そう、母親の様だ。

「今だけは、それで構わないですよ」

そう言つて、麟の頭を撫でる彼は本当に母親にしか見えなくて。

「からかえない」

ちつとも面白くない。

しょうがないから竜牙君をからかおう。

見てみれば、物欲しげな目をして狼牙君達を見ている。

「母さん……」

こっちはシリアスか。

「ハイハイ、もう良いよ。さっさと本題入ろう」

面白く無くなった僕は話を進める事にした。

旅立ちの日 夕方 その三（前書き）

旅立ちの日　夕方　その三

「はい、とりあえず現状の確認をします」

パンパン、と手を鳴らし師が言う。

「十年前に、教団によって両親を亡くした竜牙君。当時六歳、幼心に教団への復讐を誓いこの島国『倭』に漂着ここに住む龍「大主黄牙」に保護される」

「それから、三年後に僕に弟子入りし修行とイジメと悪戯を受ける。そして現在、元服を済ませたものの、母親の泪が定着しなかった。ここまではいいね」

「ああ、翁の言うことには、水は陰だから女心を知ればいいのでは。と言われた」

そう言うつと、狼牙は合点がいったようだ。

「それで僕のところへ挨拶ついでに聞きにきた」

「その通りだ。それで、知っているのか？」

「心当たりはある」

「教えてもらえないだろうか？」

「構わないけど、条件がある」

師が真剣な表情を言う。

「この旅には、狼牙君と麟ちゃんを連れて行きなさい」

「どうしてだ」

「僕としても、教団は邪魔だからね。訳有つて僕は動けないから、彼らに頼む事にしたんだ」

「俺に着いていかせる必要は、無いだろう。他人の面倒までは見れん」

危険な旅になる事は確実だ。

「大丈夫さ、彼らは僕のお墨付き。戦力としても充分だし、悪い話してじゃ無いでしょ」

そう言うつて、師が笑いかけてくる。

「この条件が飲めないのなら、教える事はできない」
詰みの一言。

「分かりました、二人を連れていきます」
師は頷き。

「結構、それじゃ竜牙君、出雲に行きなさい。そこに居る、天照大神と言う神が助けになってくれるだろう」
と教えてくれた。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。二人の用意も出来てるから、着替えたら行きなさい」

三人とも仲良くね。と言って師は客間から出て行った。

「多少、不満もあるでしょうがよろしくお願いいたします」

「いたします」

「いや、こちらこそ世話になる」

旅立ちの日 夜

「とりあえず、自己紹介しませんか？」

狼牙がそう言ったのは、村を出て野営をしている時だった。

「必要か？」

「どれ位の付き合いになるかも分かりませんし、お互い何ができるのか知っておいた方が良いでしょうから」

寝ている麟を撫でながらそう言う。

「そうだな、幾らかは知っていた方が良いか」

「ええ、それでは改めまして。大神 狼牙 と言います。

ロキさんの元弟子です。

年は、十六で同じ年になりますね」

と和やかに笑いかけてくる。

「出身は、山にある村でして涼しいところなんです」

「そうか、ところでその子は」

「ああ、麟はロキさんが連れていた孤児で私の家で引き取ったんです。

人見知りなのですが、私には懐いてまして着いてきてしまってます……。

旅は危険なので出雲にある叔母の家に預ける事にしてます」

少し寂しさを滲ませる表情をして言う。

「ロキさんは、離れない方が良いと言われましたがコレばかりは聞けません」

「そうだな、師匠も無茶を言う」

「ええ、本当に」

二人ため息を吐く。

「ところで、出来る事は何があるんだ」

「ああ、忘れてました。

私は、毛無しへの変身魔法と念動力を少しだけ。

武器は、双剣とジャマダハルです。

そちらは？」

「俺は、同じく毛無しへの変身魔法と火が吹ける位だ。
得物は、大鎌だな。

話すことはもう無いか？」

狼牙に聞く。

「ええ、今のところ」

「そうか、なら寝ている。

見張りは俺がやる」

「それでは、お言葉に甘えて」

簡易の天幕に鱗を抱えて入って行く狼牙を見送る。

月夜に一人、焚き火の音を聴きながら佇む。

出雲には、およそ一週間で着けるだろう。

仇討ちの旅、その旅立ちの日はこうして終わった。

旅立ちの日 夜（後書き）

次は、裏話です。

裏話 旅立ちの日 前日 狼牙

裏話 旅立ちの日 前日 狼牙

私は、捨て子だったそうです。

気づいた時には保育園、園長家族に引き取られていた。

家族には良くしてもらったし、友人も沢山いた。

ロキさんは義兄の悪戯の師匠で間接的にも直接的にも被害にあった。

高校は家族の勧めから寮のある高校に行く事になりました。

友人や家族と離れるのは辛いですが一人暮らしとゆう、新しい環境への期待も有ったのです。

まあ、直ぐに壊れたんですけどね。

住んでた所は神様の世界だった事が発覚したり、家族や知人が神様だったり、友人ができたり、謎の組織と戦ったり、アカシックレコード（世界図書館）の所為で世界が崩壊しかけたりと色々ありました。

あの日の私は、その世界崩壊の危機（俗に図書館事件と呼ばれる）を友人と共に乗り切り。

やっと平穏な生活を謳歌する事が出来る筈でした。

しかし……。

「ねえ、頼みごと聞いてくれるんでしょ」

こちらを覗き込むように見るロキさんが目の前にいる。

「嫌な予感しかないのですが」

また、大事に巻き込まれる気がする。

「実は、僕の管理世界にも予想外の事が起きちゃって……解決お願いね」

彼は舌をだして頭を小突くとゆう茶目っ気のある態度で頼んでき

ました。

「ロキさん、貴方は神様でしょう。」

自分の事くらい自分でなさってください」

「そうしたいのは山々なんだけどねえ……」

彼は少し困ったような顔をして言う。

「何か問題があるのですか？」

「そうなんだ」

それだけを言って、彼は口を閉ざした。

言えないような問題なのだろう、あくまでも人である私には……。

その気遣いは嬉しくもあるが哀しくもある。

しかし、

「分かりました、引受けます」

「ありがとう、狼牙君」

きつといつの日か、彼らに恩を変えしてみせる。

「それじゃあ、依頼の内容なんだけど……」

その為にもまずは、この依頼をこなしてみせる。

一週間の道のり 一日目

「私に勝てると思ってましたか？」

倒れ伏す俺の目の前に灰色の毛に覆われた足が見える。

何故、こんな事になったのか？

その答えを探す為に目を閉じる。

「もう、ダウンですか？張り合いがありませんね」

トドメです。その言葉が聞こえると同時に衝撃が襲い。

そこで、意識が途切れた。

「……さん、起きて……さい。……牙さん、起きてください。竜

牙さん、起きてください」

「……ハッ？」

突然、起こされたために驚き声を上げる。

目の前には、灰色の狼の顔をした獣人、狼牙だ。

起き上がり、辺りを見渡すと、登る朝日と焚き火の燃えかす。そ

れから、天幕があった。

「俺は、……眠っていたのか」

「ええ、ぐっすりと」

可愛らしい物を見たような口調で狼牙は言う。

「仕方ありませんよ、昨日は色々あったでしょうから。初めての

旅は疲れるものです」

「……そうだな、旅に出たのは昨日だった」

なんと無く違和感はあるが、旅に出たのは『昨日』だ。

「どうかしましたか？」

悩んでいるのが顔に出たのだろう、狼牙が聞いてきた。

「いや、少し寝ぼけているようだ」

「なら、いいです。」

私は鱗を起こしてきます」

天幕に向かつて行く狼牙、それを見て俺は、『何時もの光景』だ
と思った。

『何時もの光景』それに対して疑問を持つが……。

「既視感だろう」

母に起こされていた自分と狼牙に起こされる鱗の姿を重ねただけ

……そう判断した。

思考を終えると、天幕から二人が出て来た。

鱗が俺の顔を見つめる。

「何か、俺の顔についてるのか？」

「……、おはよう」

そう言つと顔を逸らし黙ってしまった。

「鱗は、恥ずかしがり屋なんです。」

許してあげて下さい」

俺の顔が不機嫌に見えたのか、狼牙がそう言ってきた。

「そこまで、狭量では無い。とりあえず、おはよう、二人共」

「ええ、おはようございます」

和やかに返す狼牙、しかし依然として鱗は、こちらを見ない。

「まあ、いい。出発するから天幕を片付けてくれ」

「はい、少しお待ち下さい」

天幕に近づき、触れる。

すると、天幕は泥の様に溶け、丸い真珠のような石に変わった。

「……師匠も凄い物をくれたものだ」

「まったくです、無機物なら何にでもなれる月の石なんて物を何
処で手に入れたんだか……」

呆れた様に言う狼牙、その手には真珠の様に、白く丸い石がある。
月の石と呼ばれるそれは、無機物限定だが想像した形に変化する
能力を持つ、他にも機能があるらしいが……。

俺は、知らない。

「片付けも済んだ、さつさと行くぞ」

俺は、二人に背を向けて歩き出す。

そこに狼牙が質問する。

「朝ご飯は、どうなさるんですか？」

「干し肉でも食べればいい」

そう返す。

後ろからため息が聞こえたが気にする必要はあるまい。

それから、数時間歩き続けると海が見え始めた。

「アレは、もしかして海ですか？」

「ああ、見えないが向こうに本州とやらがある。近くには港と村がある場合によってはそこに泊まる事になるかもしれん」

「食料を買ってもかまいませんね。干し肉だけでなく、果物も欲しいですから」

「好きにしろ」

どうも、食料が干し肉だけだったのが気に入らなかったようだ。

狼牙は不機嫌そうにそう言うてきた。

干し肉は美味しいのに……。

港付近の村は、大陸と本州その両方と交流がある。

つまり……。

「最悪だな」

村の様子がわかる位に近づいた事でわかった。

木造で平たい構造をした建物の中、レンガによって作られた背の

高い『教会』はよく目立った。

「おい、狼牙。ここで化けとくぞ」

「どうしたんです？」

「既に教会が建っている。此処はすでに敵地だ」

その言葉で気づいたのだろう、少し驚いたようだ。

「わかりました。麟、急いで化けましよう」

そう言つて、人間に化けた。

「これでいいですね」

肩まで伸びた黒髪を後ろで纏めた眼鏡を掛けた優男が言う。

「……優男だな」

思わず口を滑らしてしまった。

「なつ、失礼ですね。つと、それより麟も……大丈夫そうですね」

狼牙は、文句を言つた後に自身の隣に居る麟をみる。

麟は、既に背中にかかる位に長い黒髪の少女に化けている。

何処か遠くを見ている様な瞳と整つた容姿が人形を彷彿させた。

「……なあ、こいつ本当に生きてんのか」

「本当に失礼な人ですね、貴方も早く化けなさいよ。笑つてやり
ますから」

余りにも生氣を感じない麟に、俺はまたもや口を滑らしてしまつ
たところ狼牙に怒られた。

それに驚き慌てて化ける。

化けた俺の姿を見た狼牙は。

「チツ」

と舌打ちをした。

「その、なんだ、二人共、失礼な事を言つてすまない」

二人に謝るも狼牙は不機嫌なままブツブツと呟いたまま麟は相変
わらず無表情。

「リア充、爆発すればいいのに」

「何だそのリア充つてのは？」

狼牙の呟きに対する質問をすると。

「何でもありません」

と言つて麟を連れて村に歩いていった。

「ちよつと待て、置いてくんじゃ無い」

俺は急いで二人について行く。

村に入ると教会の鐘が鳴り始め、毛無し達が何処かへと歩きだした。

「着いていつてみましょう」

「ああ」

目的地が近いのだろう、段々と人が多くなってきた。

しかし、移動中にも村には毛無し以外の人間は見れない。

「どうも、教会に向かつてるようですね」

「何かあるのか？」

「私は、主日礼拝しか知りませんよ」

「主日礼拝？なんだそれは」

「日曜日にする主の言葉を説き明かす行事です」

「そんな事の為に集まるのか、信者は」

「宗教と言うのは大体そうです。それより、着きましたよ」

何時の間にか、毛無し達の足は教会の前にある広場で止まっていた。

「これから、何が起こるんだ？」

「さあ、日曜日では無いから主日礼拝では無さそうですが……」

周りの毛無しは全員、教会の扉を見ている。

その扉が開き始めた。

そこから現れたのは、司祭の姿をした肥満体の男。

「……まんまですね」

「ああ、絶対に食わない事を言うだろうな……」

「お願いですから、暴れるのだけは止めて下さいよ」

目配せして俺に釘を刺す狼牙。

「善処はする。話出すようだぞ」

司祭が口を開く

「皆さん、主は仰りました。

この世界は、我等、人のためにあると

我等に仕える者として他の者は存在すると

我等こそが真に愛された者だと

皆さん、今まで我等は偽りの神の所為で力を無くしておりました。ですが、真の神がとうとう、救世主様を遣わして下さいました。

救世主様は、奇跡を起こし、我等に力を戻されたのです。

そして今、我等は真の世界を取り戻す為に戦っているのです」

「世界は、我等、人の為だけに……真の世界、理想郷、亜人も獣も鳥も魚も竜すらも我等、人の為だけに……存在するのです」

司祭の口はまだ動いている。

けれど、俺の耳には聞こえない。

アレの声は聞こえない。

周りの毛無しの歓声も、狼牙の制止も……。

全身に力を入れると、赤い鱗が浮き出す。

人型が崩れて行く音と共に視界が高なる。

爬虫類の顔と長い首、腹以外を鱗に覆われた胴体、背中から生える皮膜の羽

太く逞しい足と腕、位を表すその指は四本。

ヒュールルルルオオーン。

変化を終えた俺は、吠えた。

「な、何故、竜がここに……」

司祭が怯えた声をだす。

「ヨケロヨ」

口に可燃性の液を為吹き出す、そして、前歯を合わせる。

「カチッ」

火花を散らす。

吹き出した液に引火し、黒い炎が辺り一面を焼いた。

「ああ、熱い？」

「ひい、服が燃えちまった？」

「髪が、アタシの髪が……」

突然の事に混乱する毛無し達。

信者には、まだ甘いだろう。

更なる苦痛を与える為には……。

「カミ、トヤラガイルノナラ、キヨウカイハ、モエヌヨナ」
毛無しに聞こえるように言う。

「まさか……止める！」

「そんな事は許されん！」

「天罰が下るぞ？」

「カミ、ナド、オラヌヨ」

空に羽ばたき、教会の上空から液を吹き出し……。

「カチッ」

爆発。

辺りに煙が広がり、教会を隠す。

俺は、煙を晴らすために勢いよく羽ばたく。
そこには……。

「……ヤハリ、カミ、ハ、イナイ」

崩れ落ち、瓦礫と化した教会があった。

放心する毛無し達。

俺は、教会だった瓦礫の上に着地する。

「ムナクソガワルイ、ヨテイトカワルガ、フタリトモ、ノレ、ス
ゲニ、ココラデル」

「……仕方ないですね、いきますよ」

村の方から狼と麒麟の獣人が現れ俺に乗る。

「くっ、直ぐにでも本部に連絡を……」

司祭が港に走り出した。

「オチルナヨ」

「それは、どういう……ウワァ！」

二人にそれだけを伝え、飛び立ち港に向かう。

貿易船や漁船が纏められているそこに、液を吹きかけて……。

「カチッ」

爆破。

そのまま本州を目指す。

「コレデ、イクラカ、ジカンハ、カセゲル」

「うう、落ちるかと思いました」

「スマナイナ、スコシ、イソイダ」

狼牙に一応謝る。

「かまいません。それより、このまま出雲まで行けませんか？」

「ワルイガ、コノスガタハ、フヨウニ、ケイカイ、サレル。ホ
ンシュウニ、ツイタラ、トクゾ」

そう返す。

「仕方ありませんね。樂ができると思ったのですが」

「ヨノナカ、ラクニハイカナイ、モノダ」

「そうですね」

軽口を叩きながら空を飛ぶ。

「麟、あまり身を乗り出してはいけませんよ」

「……綺麗」

「ハンコクホドデ、ツク。ゾンブンニ、タノシムト、イイ」

眼下に広がる海原、麟はこの景色を気に入ったようだ。

「もう、昼を過ぎたようですね」

東寄りになった太陽を見た、狼牙が言う。

「アノ、ムラノコトラ、カンガエルト、アチラノミナトモ、キケ
ンダ」

「もしかして、今日も野宿ですか？」

港付近の危険性を説くと狼牙がそう聞いてきた。

「キタイハ、デキン」

それを聞くと狼牙は、がっかりした声音で「そうですか」と言っ
て黙ってしまった。

結局、この日は港付近の村に教会を見つけた為に野宿となった。

一週間の道のり 二日目（前書き）

幼児退行及びB・L注意報発令

一週間の道のり 二日目

俺は、燃える村を背景に灰色の狼女と対峙している。

灰色と言っても、黒に近い灰色で、狼牙の白に近い灰色とは別物だ。

しかし……。

「何故、こんな事をしたんだ ● ● ?」

「貴方に愛して欲しいから」

「起き……さい。 りゅ……ん、起きて……さい。 竜牙さん、起きて下さい」

体を揺すられて、目を覚ます。

目の前には、白に近い灰色の毛をした狼の顔。

「おはよう、狼牙」

とりあえず、挨拶をする。

「おはようございます、竜牙さん。」

うなされていましたが大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ」

「それなら良いのですが」

そう言って天幕から出て行く狼牙。

どうも俺はうなされていたらしい。

確かに、決して良い夢とは言えないが……。

あれは、誰なんだ？

昨日の夢に繋がるようだがわからない。

記憶には、心当たりは無い。

この辺りでは狼人間、自体が珍しい。

彼等は、本州と蝦夷を流浪する民だ。

灰色狼人間の亜種が本州を、蝦夷狼人間が蝦夷を流浪している。

四国や、俺の居た九州では、流浪するには狭いのだから。

「所詮、夢か……」

幾ら考えても答えは出無い、ならば夢と割り切り忘れるべきだろう。

「竜牙さん、早く出てきて下さい。朝ご飯できてますから」
狼牙に声を掛けられた。

少し時間をかけ過ぎたようだ。

「すまない、すぐに行く」

横になつていたために、少し乱れた衣服を直し天幕から出る。

「……朝ご飯か」

肉を焼いたのだろうか？

香ばしい匂いが辺りに漂っている。

鉄板の上に、肉と野菜が入った薄いパンの様な物が三枚あった。

「意外とできるもんですね。お好み焼き」

「これは、お好み焼きと言うのか」

「ええ、小麦粉を水に溶いた物の中に具材を入れて焼くだけなんです簡単出来るんですよ」

なるほど、肉と野菜だけで無く、炭水化物も一品で補える。

調理も簡単と素晴らしい食品だ。

しかし……。

「材料は何処からもってきた」

「いやですねえ、あの村からに決まってるじゃないですか」

「あの時、村には毛無ししかないない。」

そして、その毛無しも殆ど教会前にいた」

狼牙を見るとこちらから目を反らした。

「だ、大丈夫ですよ。お金は置いてきましたから……、ですから、その、そんなに睨まないで下さい」

どうも、萎縮したようだ。

「まあ、今回は俺が暴れたせいもあるからな。強くは言えないが、もうやるなよ」

「……わかりました」

沈んでしまった狼牙を見て少し、罪悪感を持った。

「あゝ、でも食事は、助かる。俺は、料理なんて出来ないからな。保存食ばかりになると思ってたからさ、干し肉しか持ってなかったし。……ありがとう」

慰めの言葉をかけると顔を上げて笑顔になる。

「いえ、そんな、お礼だなんて……。どうか、それは、食べてからお願いします」

そう言つて、鉄板をお好み焼き毎に三枚に千切り、皿に変化させた。

「はい、お口に合うと良いのですが」

お好み焼きを載せた皿を差し出してきた。

それを 受け取る。

なんと、皿は鉄ではなく陶器製の物になっていた。

「……便利だな、月の石」

使いこなせば、架空の物質も再現できるかもしれない。

「あつ、お箸を忘れてました。今、出しますね」

狼牙が今度は、自分の皿から摘み取った粒を箸に変える。

食器に不自由する事はなさそうだな。そんな事を思いながら箸を受け取る。

麟にも箸を渡した狼牙が手を合わせる。俺と麟もそれに合わせ

て。
「……いただきます」

食事を始めた。

初めて食べるお好み焼き、匂いからして美味そうだったが……矢

張り美味かった。

「美味いぞ、狼牙」

「ありがとうございます、お口に合っただけによいです」
ふむん、機嫌は、直ったようだ。

狼牙は、心底嬉しそうな顔をしている。

麟は……。

「麟も喜んでくれてなによいです」

「あれは、喜んでるのか」

相変わらず、無表情にしか見えない。

その後は、箸も進みお好み焼きは直ぐに無くなってしまった。

「ご馳走様」

「はい、お粗末さまでした。食器は、そのまま結構ですから食
休みでもして下さい」

「そうさせてもらうよ、出発できるようになったら教えてくれ」

「わかりました」

俺は、天幕に戻ることにした。

声をかけられるまで、月の石に慣れる為の訓練に使うためには、
狼牙の提案は丁度良かった。

天幕の中、見よう見真似でやってみたところ……天幕は見事に倒
壊した。

「勢いで骨組みを砕いたのがトドメだな」
倒壊の原因を考えていると。

「何をなさってるんですか」

狼牙から声をかけられた。

「いや、少しは月の石に慣れようかと」

「言つてくだされば、付き合いましたのに……」

呆れたような声音で言われ、きまりがわるくなる。

「麟の食事も終わりましたから、近くの村まで行きましょう。

そこで、指導しますから」

「ああ、よろしく願います」

「では、出発の準備を」

狼牙が、皿と箸をまとめるとそれ等は、崩れていき。跡には、白い真珠のような月の石だけが残された。

俺が天幕に触ると天幕は泥のように崩れてゆき、月の石が残された。

俺達三人は、次の村を目指して歩きだす。

「次の村までどれくらいかかるでしょうか？」

「大体、二刻程だな」

「着く頃には、昼時ですね」

「教会が無ければな」

着くには着くのだが教会があれば近づきたくない。

「……その時は、物資の補給だけしてきます」

「俺は、村の外で待ってるよ」

他愛ない会話をしながら……。

一刻半程過ぎた頃、道の先に村が見え始めた。

「……教会は、無さそうだな」

見えるのは、木造建築ばかりで、レンガ造りの教会は見当たらない。

「今日は、野宿しないで済みそうですね」

「そうだな」

そのまま半刻歩いて村の中、毛無し以外の人間もいるのだが……。

「雰囲気が悪い」

「ええ、まったくです」

毛無しと他の人間との関係がぎすぎすとしている。

教団と関係があるかもしれない。

「情報が無い事には何も進みまない。宿をとり次第、情報を集めるぞ」

俺は、情報収集を提案する。

「仕方ないですよ。指導は宿でもできますし、日中は情報集めに当てましょう」

狼牙も賛成のようだ。

「……」

「麟も賛成だそうです」

「そうか」

まずは、宿屋を探す事にした。

「旅人相手の商売だ。多分、この辺りにもある筈………見つかったぞ」

少し辺りを見回しただけで見つかった。

飯屋も商っているようで情報も手に入りそうだ。

「存外、楽に済みそうですね」

「教団が絡んで無ければな」

中に入ると、喧騒が耳に入ってきた。

取っ組み合ってる毛無しの男と猫人の男、それを止めようとする周りの人々。

その騒ぎを避けて進み俺は、帳場にいる毛無しの女将に聞く。

「この騒ぎは何だ？」

「いらつしゃい。この騒ぎはねえ、毛無しが発端でね。奴さん、

あの莫迦げた宗教を鵜呑みにしてんのさ」

「それで」

「その宗教に港の村から追い出されたあの猫人が、奴さんがあた

しに宣教してんのを聞いて怒り心頭」

「今に至ると」

「そのとおり」

「そうか、部屋を借りたい」

「何人だい？」

「三人だ」

「飯付きなら銀貨三枚 飯無しなら銀貨一枚と銅貨五十枚」

「高くないか」

「飯付きは、ここでの食事が無料さ」

「それなら飯付きで頼む」

銀貨三枚を渡す。

「毎度あり、部屋は奥の間以外なら好きな所を使いな」

女将は、商売用の笑顔でそう返してきた。

「一部屋借りるよ」

俺は、狼牙達を呼び飯屋の奥にある部屋の一つに入る。

騒ぎは、何時の間にか収まっていた。

「……成る程、教会は無くても教えは広まっているようですか」

座敷に入り、先程、女将から聞いた話を狼牙達に聞かせたとこ
ろ、そう返してきた。

「宣教士が誰か分かれば楽なんだがな」

「港の村に寄らなかつたのは早計だったかもしれないね」

狼牙の言葉に少し、きまりが悪くなる。

「とりあえず、状況を整理しよう」

「そうですね。」

まず、九州の港付近の村には既に毛無ししか、いませんでした」

「次に本州の港付近の村は、教会が有ったことと、先程の騒動を
見る限り教団の支配下にあるだろう」

「そして、この村の様子もオカシイ。調べると教えは既に広まっ
ているようです。それも、雰囲気が悪くなる位には」

「教会が無いところを見るに、まだ宣教は完全では無い」

「つまり、宣教士が来てからそう時間は経っていないようです」

「尻尾位なら掴めそうだな」

「出雲に着くまでに片付けば良いのですが」

三人とも立ち上がり座敷を出る。

「女将、少し出る」

「はいよ、行つてらっしゃい」

女将に声をかけて宿屋を出た。

「何処から行くか」

「広場なんかどうでしょう。彼等は派手好きなようですから」

「そうだな、広場に向おう」

狼牙の提案により、村の中心にある広場を目指す。

はたして、そこには人だかりが合った。

「あっさり見つかったな」

「拍子抜けですね」

皆が和服を着てるなか、ヒドく目立つ襟をした洋服に南瓜パンツを履いた天辺ハゲで中肉中背な毛無しの男が、そこにいた。

「……何処の王子様でしょうか」

「王子の服装は知らんが、宣教士の服装では無いだろうアレは…

…」

二人して、思わず呆れてしまう格好だった。

確かに派手だし華美な服装だ。しかし、心象は最悪である。

「宣教士様！」

「今日も素敵です宣教士様？」

「奇跡を！今日も奇跡をお見せください？」

騒ぐ毛無し達、どうやらアレは宣教士で間違い無いらしい。

「どうです、宣教士とは言え仇の一人を見た気分は……」

「なんというか、アレが仇つてのは釈然としないな。

うん、凄く釈然としない。

きつと、百年の恋が冷める位には釈然としない」

間違いであつて欲しいと思うが、残念ながら現実である。項垂れていると、宣教士がゆつくりと手を挙げた。

すると、騒いでいた毛無し達が黙る。

「皆様、暫しの間、静粛に」

見た目に反して重厚な声が広場に響く。

「主は、泥から人間を作られた」

宣教士は地面から土をすくい、それに水をかけた。

「土は、体を作り」

泥をこねる。

「水は、魂となった」

泥を丸める。

「形は、主を模した」

泥を人型にした。

「しかし、刹那に崩れた」

泥が動き歩きます。

「水が土から逃げたからだ」

泥は、見る間にヒビ割れ。

「泥は土くれに還る」

崩れさった。

毛無しが沈黙を破り歓声を挙げる。

「これが奇跡か……」

「違いますよ、あれは魔術です」

俺のつぶやきに狼牙が返してきた。

しかし、俺はそんな魔法を知らない。

「土くれの人形、大陸にはそれを作る魔術があります」

「そうなのか」

「ええ、今のは、簡略してるので直ぐに崩れましたが……」

狼牙が説明をしていると。

「亜人が失礼な事を言っつな！」

宣教士が間に入ってきた。

何時の間にか、毛無し達がこちらを睨んでいる。

「これは、神の奇跡だ。魔術などの邪法と同じにするでない？」

「では、やってみせましょうか？」

狼牙は、宣教士を挑発する。

宣教士は観衆の手前、逃げる訳にはいかない。

「やってみろ、できる訳ないがな」

そう言つて 不敵に笑う宣教士。

「本当に大丈夫なのか？」

「まあ、見てて下さい」

観衆の前に進む狼牙、その姿は自信に溢れていた。

「先程の泥人形、材料は単純、土に水それから……髪の毛です」
宣教士の顔が歪む。

「本来なら、神の力を借りる為に紙に神を意味する文字を書くのですが。」

今回は、ほんの数秒動かすだけで良いので個人の一部を使いましてね」

一息吐き、

「土は、体を作り。

水は、魂となった。

形は、主を模した。

しかし、刹那に崩れた。

水が土から逃げたからだ。

泥は、土くれに還る」

宣教士の教えを暗唱した。

「泥を人型にすることで体を固定、神の名の代わりに自身の一部を入れることで、それを魂とした。

主の真似事をするこの術、あなた方にとっては禁忌ではないでしょうか」

そう言つて、狼牙は泥を狼人型の人形にして、

「これを入れれば完成です」

自らの髪の毛を一本引き抜き、観衆に見せつけてから、人形に入れた。

「歩きますよ」

人形を地面に倒して置くと、立ち上がり、歩いた。

「崩れなさい」

その一言で人形は土くれに還った。

観衆は、息を呑んだ。

「あ、悪魔です！」

こいつは、亜人の皮を被った悪魔です！

騙されてはいけません？」

宣教士が叫ぶ、それに対して狼牙は涼しげな顔をして返した。

「これが悪魔の所業なら、貴方のしたことも、主のなさったことも同じですね」

「結論そうだけど。なんか間違ってるじゃないか？」

「今は、悪魔が微笑む時代なんです」

俺のツツコミにフッフと笑いそんなことを言う。

「とにかく、毛無しだけが特別な存在では無いことの証明にはなつたと思うのですが……まだやります」

声音を低くして凄みを持たせて言う。

宣教士は、

「きよ、今日のところは見逃してやる？」

しかし、貴様には何時か天罰が下るぞ？それまで、悔い改めて待っている！」

と甲高い声で叫び、逃げて行った。

「悔い改めたら天罰も何も無いでしょうに」

「まったくだ」

観衆もそれを見て、散り散りになっていった。期待していた分、失望も大きいだろう。

この村が教団に毒されることは当分無いと思われる。

「あつ、捕まえておかないと宣教止まりませんね」

「今更それを言うか」

疲れたので、俺達は、アレを追わずに
宿屋に戻ることにした。

宿屋に戻り、座敷で寛いでいると女将がやって来た。

「お前さん等、あの奇天烈な奴の鼻をあかしたんだってねえ」

「奇天烈な奴……ああ、アレのことか。そいつは、その狼牙が
やったんだ。俺は見てただけさ」

「お前さん等がやったには代わり無いんだろう」

女将は、妙に気分良さげに言う。

「ええ、そうですが。それが何か」

「今、飯屋の方がその話で持ちきりでねえ。

莫迦な宗教を宣教する奇天烈な奴を追いつ出した功労者、港の村か
ら来た奴等が宴会するから来てくれだとき」

ほら、行った。行った。と俺達の背中を押す女将。

そのまま、飯屋に入ると……。

「酒臭いな」

宴会どころか酒盛り状態だ。

狼牙は、隣を座敷に戻して来ると言つて逃げた。

「おう、功労者一行の一人じゃねえか」

「そんなとこにいないで、こっちにこいよ」

猫人と犬人に捕まり、空いている席に着かされる。

何時の間にか手には、酒の入った杯があつた。

「さ、さ、グイッと」

全員がこちらをジッと見ている。

飲むしか無い。

杯を傾け一気に酒をあおった。

途端に起こる歓声と拍手。

「いい呑みっぷりだ」

「竜人ならこんなの水だろう」

「竜だけにウワバミかい、じゃんじゃん呑みな」

杯が空く、酒が注がれる、呑む。

杯が空く、酒が注がれる、呑む。

この繰り返しを経て、最後には……。

「……ぼくだけになっちゃた」

何時の間にか、幼児退行していた。

宿屋の方から音がこちらに近づいてくる。

「竜牙さん、大丈夫ですか？」

狼牙だ。

「だいじょうぶだよ」

「そんな、呂律が回らない状態で言われても。座敷まで戻れますか？」

「うん」

立ち上がり歩こうとするが……。

「ふらふらする」

千鳥足になる。

「世話がやけますね」

狼牙がこちらに近づいてきて、ぼくと肩を組む。

「これなら、大丈夫ですか？」

「うん」

ゆっくりとだが、歩ける。

寝転がっている人を避けながら座敷に向かう。

こんなに酔っているぼくの世話をやく彼はなんだか。

「おかあさんみたい」

「失礼な、せめてお父さんと言って下さい」

「え、りんちゃんのお世話をしているとことかあ、あさげのじゅん
びしてくれるところとかあ、おかあさんにしかみえないよあ」

そして何より、滲み出す気配が母親の物と酷似している。

「ねえ」

そのせいで

「何ですか？」

口を滑らせた。

「おかあさんっていつていい？」

今は亡き母を求める声を出してしまった。

狼牙を見つめる。

彼の目は見開かれている。

「だめなら、だめでいいよ」

逃げようとしたぼくに彼は……。

「構いませんよ」

優しげに微笑んでくれた。

「あつて、みつかだよ？」

「時間が必要ですか」

「ぼく、よつてるんだよ」

「別に、今だけでも構いませんよ」

「おかあさん」

「何ですか？」

座敷の中、狼牙を抱きしめた。

彼は、ぼくの背中をあやすように叩く。

「今まで大変でしたねえ」

「おじいちゃんもしょうもいたからがんばれたの」

「それでもですよ。あなたは、本当に良く頑張りました」

「まだいっぱいやらなきゃいけないよ」

「私も手伝いますから。安心なさい。さあ、お休みですよ」

「うん」

布団に近づく、ぼくは狼牙から離れて布団に入る。

「子守唄は、いりますか？」

枕元に座る狼牙が言う。

「いない」

「なら、坊やにはおやすみのキスを……」

嘴に触れる柔らかい感触。

温かいなあ。

「おやすみなさい、坊や」

そのまま、ぼくは夢におちた。

一週間の道のり 二日目（後書き）

次の話は、番外です。

この後の狼牙の話です。

おそらく、否定ばかりの展開かもしれませんが。

一週間の道のり 二日目 夜

「やってしまいました」

つい、保育園の子供達を思い出して。

あやすまでは問題無いんです。

問題なのは……。

「おやすみのキスって、ああもう、何してるんですか私？」

寝ている二人を起こさないように静かにされど激しく自分を叱咤する。

「うう、外に出て頭を冷やしましょう、そうしましょう」

宿屋を出る、空には満天の星そして……。

「満月」

村を歩きながら思い出すのは月の石、元々は向こうの神（知人）の作り上げた物。

その能力は、魔法の行使と無機物の生成、それから召喚用の媒体に筋力の増加そして、

「性転換能力」

神曰く、俺のモットーは産めよ育てよ同性愛はナンセンスだ！
な宗教の神様。

同性による性的な干渉があつた場合、強制的に性転換する。

「キスってそれにあたりますか？ 宣教士さん」

「何のことやらさっぱり」

背後の路地から宣教士が現れた。

「同性愛ってどの程度からその判定がくだるのかを教えていただ
けませんか？」

「異形のまぐわい等全て悪よ？」

宣教士は重厚な声で叫ぶ。

「善し悪しを聞いてる訳じゃないのですが」

はあ、と肩を竦めて溜息を吐く。

「まあ、それは置いておきましょう」

一息置いて。

「こんな夜分に何の用です」

咎める様に言う。

「知れたこと、貴様に天罰を下しに来たのだ！」

宣教士は、叫ぶ。

「天罰は、主とやらが下すものでしょうに」

「黙れ！ 貴様の相手はこの土くれよ」

宣教士が指を鳴らすと……地鳴りと共に地面から五体の2m程のゴーレムが現れた。

「それだけですか？」

「ハッ、貴様なんぞには過ぎた敵よ」

「試してみます？」

「試すまでも無いわ！ やれ、ゴーレム共」

迫るゴーレム、その速さは人の走りと同じ程度しかない。

「ゴーレムを倒すには、カバラ式の場合、shemと呼ばれる神の名をかたどった文字の書かれた羊皮紙を引き抜けばいい」

「ユダヤ式の場合は、ヘブライ語で真理を表すemethからeを取り死を表すmethにすればいい」

独白をしながらゴーレムの攻撃を避ける。

「そして、二つに共通する点としては……ハアッ」

一体のゴーレムの頭を掌底で穿ち中の羊皮紙を握る。

「どちらも、頭に羊皮紙がある」

取り出した羊皮紙を見るとemethと書いてある。

「やはり、ユダヤ式ですか……」。

この世界にもユダヤ教はあるようですね、安心しました。あなた方の源流が同じであることに」

eを千切り羊皮紙を捨てる。

襲いくるゴーレム、をカウンターで穿ち羊皮紙を握りeを千切る。

瞬く間にゴーレムはいなくなっていた。

「まだやりますか？」

呆然とする宣教士に話かける。

「当たり前だ！ 苦節五年をかけて作り上げた秘密兵器……ジャ
ンボゴーレムがまだ残っている？ 出でよ！」

パチンツ、と指を鳴らす。

「……」

「……」

「……来ませんね」

きまりが悪いのか、顔を赤くする宣教士。

「村の外に出ましょうか？」

「ハイ……」

沈んだ宣教士を連行して村の外に出る。

「この道を進めば港の村に着きます。」

あなたにも家族がいるでしょう……命までは取りません国に帰
なさい」

そう言つて、宣教士を送り出そうとしたら突然、地震が起きた。

「まさか」

「フハハハハ？ そのまさかよ。」

今の地震は、俺様のゴーレムが港の村にある教会の地下からこ
ちらに向かつてくる音よ」

見事な悪役っぷりのセリフ。

しかし、

「そんな、地面にへばりついた状態で言われても……滑稽なだけ
ですよ」

「黙れ！」

今頃、教会は倒壊しているだろう、他ならぬ宣教士の巨大ゴー
レムによって。

「莫迦も極まると厄介ですね」

「莫迦と言ふな！ そして、何故貴様はこの揺れの中立ってい

れる？」

その質問に私は、笑顔で答える。

「なんせ、私は天使ですから」

「は？」

呆然とする宣教士を放っておき、私は月の石を飲み込む。

オリジナルの月の石は、竜牙の持つロキさん印のレプリカと違い
泪と同じ使い方ができる。

端的に言つと、力を大幅に上げることができるのだ。

光が辺りを包みこむ。

空戦用の翼を想像すると背中から生える感触がある。

光が収まると、白い翼を背中から生やした白い雌の狼人がそこに
現れた。

ん？

『雌の狼人』

疑問符を浮かべていると、空から紙が降ってきて顔に被さった。

「何ですコレ」

見てみると、こう書いてある。

『ウルフ君改めウルフちゃんへ

久しぶりです。

この手紙は君が性転換した知らせが届いたので至急作成しました。
アウトラインの設定はB以降でした。

あつ、Bじゃ分からない。

正解は、キスの時点でアウトです。

手を繋ぐまではセーフでした。

そして、嬉しいお知らせです。

今回も例にならつて賭け事の対象になってました。参加者は現在
全員、出雲に居ます。

結果は……俺の一人勝ちです。

大勝の分け前として月の石に組み込めるパーツを天照のお姉さん
に作って貰ったので、受け取りに行ってください。

追伸、その相手とお幸せに

by 園長（神）『

読み終えた途端に破いて捨てた。

「今は、ゴーレムを潰すのが先ですよ。フフフ、フハハハハハ」
ゴーレムにこの怒りをぶつけることが先決です。

「ウォーミングアップ位にはできますよね」

羽ばたき、空に上がる。

港の村の方を見てみると、確かにゴーレムがそこにいた。

「ゴジラ位は、ありますかね」

近づきゴーレムの周りを一周。

ゴーレムは、追うように腕をはらうが……。

「ノロマですね。」

そんな早さでは、氷ますよ」

何時もの様に氷魔法を使おうとするが……。

「出てこない、一体どうして？」

まさか

「属性が反転したんですか」

試しに火を使うと簡単に出てきた。

今までどれだけ練習しても出なかった火が。

「なら、焼き尽くすのみ」

足下を焼き水分を無くす、すると泥人形は倒れた。

「土くれは動かないですからねえ」

ニヤリと笑い、ゆっくりと焼いていく。

「まずは、右腕から」

一気に肩口まで燃やしきり、右腕は焼け落ちた。

「威力は充分、次はじっくりと左腕を」

五本の指先からゆっくりと焼いていき

掌、腕、段々と炎が登っていく。

「木も使えそうですね。」

胴体は、木で壊しましょうか」

ダルマになったゴーレムの胴体に触れ、木を使う。

「これは、中々どうして、素晴らしい」

木は、ゴーレムに含まれていた水と養分を全て吸いとり大樹となった。

「羊皮紙も風化したようですし、終わりですね」

さて、宣教士はどうでしょうか？

村に戻ると、宣教士は生き絶えていた。

渾身のゴーレムが破られたと知り自害したのか、それとも……。

「考えても仕方ないでしょうね」

月の石を取り出して元の姿にもどり思考を中断する。

旅は始まったばかり、大陸に行くのも一筋縄では行きそうに無いなと思いつつ宿屋に戻る。

今日は少し疲れた。

「毛の色も変わりましたしね」

白に近いグレーの毛の色は、黒に近い灰色に変わって……。

一週間の道のり 三回目

早朝、日は登りきつておらず。まだ、月が空に残っている。何時もならば、獵師が森に向かう姿を見かけるだけなのだが。この日は、様子が違った。

「こいつは……た、大変だ！」

獵師が村の入り口で宣教士が倒れているのを見つけた。死体の喉には短刀が突き刺さっており既に生き絶えていることは明白であった。

獵師は、急いで村に戻りこの事を知らせた。その声は、村中に響き渡り月が沈みきる頃には大勢の人が集ったとゆう。

「それで、宣教士に絡んでいた俺たちに話を聞きたいと」

「お急ぎのところ申し訳ありませんが、捜査に協力していただけませんか？」

朝方、二日酔いで寝込んでいたところ女将に叩き起こされた。俺は飯屋の机で自警団の兎人に取り調べを受けている。

「……今日は厄日かな？」

こつも衝撃的な事が続けて起こるとは……。こつちは二日酔いで頭が痛むとゆうのに。

「顔色が悪いようですが？」

「あゝ、二日酔いだ。気にしないで欲しい」

「はあ？」

そう言つて、女将の置いていった水を呷る。兎人は、辺りを見回して……。

「あの、お連れの二人はどちらに？」

「ああ、やっぱり連れて来ないとダメか？」

「聞き込みですから」

思わず溜息を吐く、なんせ二日酔いで無くても頭痛がしそうな出来事の一因だ。

正直、どう説明すれば良いのやら。

「なあ、俺の連れがどんなか知ってるか？」

「勿論、麒麟の女の子と狼の『男性』の筈です」

「なんで、知っているのかを聞いても」

「宣教士を追いつ出した方々として噂になってますから。自警団として調べてあります」

「……はあ」

こちらの面子は把握済みとなると……ますます、合わせる訳にはいかない。

「すまないが、連れは俺より酷い二日酔いで寝込んでいる。聴取は俺だけにしてくれないか？」

「それは、少し困ります」

「そうか……なら仕方あるまい」

席を立ち、座敷に向かう。

兎人は、俺が連れを呼びに行くと思っているのか座ったままだ。座敷には、確かに二人いる。

増えても減ってもいない。

しかし……。

「どうかしましたか？」

「お前をどうにかしたいんだよ……」

一人、性別が変わっている。

「なんで、お前は今朝になつたら女になつてるんだよ……」

「何度も言いましたが、私にもわからないのです」

女になつた狼牙は、しれつと応え。俺は頭を抱えた。

怒鳴れば、頭痛が酷くなるために文句は全てしりすばみになる。

何故、狼牙が女になつたのか。

そして、何故……。

「お前が夢の女に似てるのか……」

「知りませんよ。そんなこと」

狼牙の姿は、毛は黒に近い灰色に変わり胸も少し膨らんでいる。本当にどうしてなんだろうか。

「今はそれより、自警団の方に説明しませんが」

「性別が変わった説明もか？」

「男装してましたでよろしいのでは？」

「お前、毛の色も変わってるんだぞ」

「……白粉でなんとか」

「どっから持ってくるんだその白粉」

「勿論、月の石を使います」

「……鏡も作れば良いとして、時間を稼げば案外いけそうだな」

「そうしましょう。」

竜牙さん、時間稼ぎはお任せしました」

「あつ、おい、待て、閉めるな……糞っ」

襖を閉められた。

俺は、肩を落とし頂垂れる。

「持って四半刻だからな」

「わかりました」

そう襖越しに伝え、俺は頭の痛みを我慢しながら飯屋にむかった。

「なるほど……、それであなた方はそれを止めるために旅を」
「そうなるかな」

時間稼ぎとして、俺は教団を追っていることを話た。
行く先々で、こうした自警団に勧告していけば宣教は少し遅くなるかもしれないな。

時間稼ぎは思わぬ成果をだしそうだ。

「人間同士まったく上手くいっているのに、一体どこの誰がこんな事を考えたのやら」

「誰かは知らんが、宣教士には気をつける。一宗教だと思って侮ると痛い目にあう」

「よし、分かった。後の話は本部で聞かせてもらおうか」

兎人が立ち上がり、縄を持ってこちらに迫る。

「ちょっと待て、何で俺を捕まえようとする」

「死んだのは宣教士だ。」

そして、動機もあれば最後に目撃された時、近くにいたのもお前達。

本部に来てもらうには十分だ」

くそつ、二日酔いのせいで墓穴を掘った。

時間稼ぎにばかりに気がいつて、不味いことになってしまった。

立ち上がり、机を挟むように逃げる。

狼牙はまだなのか……。

周りは、何時の間にか野次馬に囲まれており、逃げることは難しい。

「観念するんだな」

「……クッ」

捕まるしかないのか？

諦めかけたその時。

「何です、この人ばかりは？」

狼牙が野次馬を割って現れた。

その姿は、男の時と同様に白に近い灰色の毛である。

ただ、着ている男物の着物が少し大きく布が余っていた。

「貴方は、この方の連れですね」

「ええ、それでは貴方が自警団の方ですね」

狼牙はチラリとこちらを見て、直ぐに視線を兎人に移した。

「……宣教士の死体が見つかったそうですね」

「はい、今朝早くに」

「港の村に向かう道で見つけたのでしょう」

兎人の言葉を遮り狼牙は死体の有った場所を言った。

「どうして」

「どうして、知っているのか。」

それは、私が目撃してるからですよ。

宣教士が死んでいるのをね」

狼牙は不敵な笑みを浮かべ続ける。

「昨晚、散歩をしてましたら宣教士に襲撃されましたね。」

まあ倒して捕縛しようとしたら逃げまして、追いついた頃には短刀を喉に突き刺して絶命してました」

言い切り、困ったものと肩を竦める狼牙。

こいつ……。

「莫迦たれ、それじゃ余計に疑われるだろうが！」

事細かに状況を説明してさらに疑いを深めるようなことを平然とやりやがった。

しかし、狼牙は笑みを浮かべながら返してくる。

「普通でしたらね」

「……そうですね、嘘はついていないようですし今回は不問にしましょう」

「ええ、助かりました」

「ご協力ありがとうございました。と言って兎人は帰って行った。野次馬も散り散りになり残されたのは俺と狼牙だけ……。俺は、狼牙に兎人が見逃した理由を聞く。」

「どうして、兎人は帰って行ったんだ」

「ああ、私の証言が本当だと確信したからですよ」

「何を根拠に」

「人間、嘘をつく時は大なり小なり動揺します。」

それは、様々な形で表れるのですが最も信憑性が高いものとして心拍が挙げられるのです。

兎人は、耳が良いのでそれで確信したのでしょうか」

「そうなのか」

一応、納得はいく説明を受けてこの話は終わりにした。問題なのはこれからだ。

「狼牙、買い物なんだが食料の前に女物を買っておくほうがいいのか？」

「あつ、大丈夫ですよ。」

白粉と鏡を戻せば月の石で作れますから」

「……そうか」

要らぬ気をつかったようだ。

その後、狼牙が白粉を落とすついでに、麟を呼び、遅い朝食を食べて宿を出た。

二日酔いは何時の間にか収まっていたようだ。

村の市場、食料を買いに来たのだが。

「おや、娘さんかい」

「お兄さん、若いのにやるねえ」

「親子で旅かい羨ましいね」

行く先々で子連れの夫婦と勘違いされる。

狼牙の雰囲気と小さい麟、年の割りに落ち着いているらしい俺。

傍目から見ればそうかもしれないが……違うと言いたい。

俺が何とも言えない気恥ずかしさを味わっている最中も、悪ノリした狼牙はそれらしく振舞っている。

麟は、右手で狼牙の手を握りしめているのだが……何故、左手がこちらの手に伸びる。

その手を避けると麟はジッ、とこちらを見つめてくる。

「……」

「握らぬぞ」

「……」

「そんな目で見ても握らぬぞ」

「……グスッ」

「グッ、に、握らぬからな」

麟が今にも泣き出しそうな目で見つめてくるがこれ以上の羞恥には耐えられない許せよ。

「どうして意地悪するのですか」

「ぬう、しかし」

「まったく……仕方ありませんねえ」

そう言っただけで狼牙は麟を抱き上げてあやす。

そして、こちらに意地悪な笑顔を向けて周囲に聞こえるように言う。

「麟、お父さんが意地悪するからって泣いてはいけませんよお」

「な、何を言っただけ」

「まったく、手を繋ぐくらいしてあげても、よろしいではありませんか？」

お、と、う、さ、ん」

や、やられた。

師匠に悪戯される側の人間だと思って油断していた。

こ、こいつも悪戯する側の人間だ！

もっと早くに気づくべきだった。

「やあねえ、狭量な父親は……」

「きつと、亭主関白で老人になったら家にいるだけよ」

「あんな小さい子に意地悪するなんて信じられないわ」

周囲の中傷が胸に刺さる。

俺は……。

俺は……。

俺は、羞恥心を捨てた。

「お、お父さんが、わ、悪かった。

麟、許してくれ」

大衆の前で頭を下げた。

「……手」

「うん？」

「……手……繋いで」

「あ、ああ、いいだろう」

麟から差し出された左手を握る。

それを見て狼牙は麟を降ろし右手を握る。

「麟、嬉しいですか？」

「うん」

「それは良かった」

可愛らしい笑顔を浮かべて麟が言う。

狼牙もそれに笑顔で返す。

辺りから、拍手が起こった。

何だコレは？

納得はいかない。けれど、不思議と悪い気はしなかった。

「……今はウソだけど」

「何か言ったか？」

「いえ何も」

「……そうか」

夢の女に似た空気を一瞬感じたが直ぐにいつもの狼牙に戻った。

この時に、狂気に気づけば何かが変わったのかもしれない。

彼の中に彼女が産まれてからの変化に。

買い物を終えて村を出た。

旅の空は何処までも落ちていけそうな位に深い青空で酷く自分が小さく思えた。

「家族か……」

「また、やります」

「いや、今はまだやることあるから」
「そうですか」

では、それがすみしたら……。

一 週間の道のり 三日月（後書き）

二作前のゴーレムについて少し改訂しました。

また、作中で解説していなかった金銭についてですが。

銅貨一枚＝十円 として。

銀貨一枚＝銅貨百枚

金貨一枚＝銀貨百枚

となります。

質問等は随時、受け付けております。

一週間の道のり 三日目 夜

雲一つない空に、煌く星々、月も綺麗に見える夜。
日暮れ前に、次の村に着いた私達は宿を取り休む事になった。
今、私は一人、村の外で空を見上げている。

「家族」

頭の中に染み付いた言葉。
私には、家族がいる。

けれど、血は繋がってはいない。
失礼だが、何かが違う気がした。
その異物感が昨日から大きくなった。

「昨日の事」

昨夜、竜牙さんの幼さに隣を重ねた。
彼もあの娘も家族がいない。
だから、私が守らないと……。
そう思っていた。
けれど、本当は違うのでは無いだろうか。

「私は狼」

この月の石は、その人に最も近い性質を持つ生き物に変える。
私は狼。
狩猟民族にとっては畏怖

農耕民族にとっては畏敬

その姿は、残酷な印象を与える

その姿は、慈悲深い印象を与える

敵には容赦せず

味方には寛大に

月と太陽

相反する性質を保つ

そして私は一人

「一匹狼」

狼の群れは、基本的に家族で構成される

けれど、私は一人

他所の群れに入るも馴染みきれない

子供達の世話をやいたのは、その痛みを和らげるためなのか

一匹狼は、広大な世界から番いを見つけた

けれど、そんなことが出来るのはほんの一握りだけ……多くは道

半ばで倒れる

だけど、妾は見つけたのかもしれない

同じ境遇、同じ性質を持つ者を

「竜牙」

竜の子にして龍の子

その性質は歪められたがまだ間に合う

悪魔としての竜

神獣としての龍

残酷な印象を与える竜

慈悲深い印象を与える龍

火と水

彼が完成すればきつと……

妾と同じになる

きつとそれに彼も気づく筈

そしてワタシの……

「家族になつて」

「今までを取り戻す位、幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに
幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに
幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに
幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに
幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに……なるの」

だ、か、ら、早く教団を潰さなくちゃ

「それまで待っていて下さいね。
リュウガ」

フフ、フフフフ

暗い夜の中星々の煌きも、月の明かりも、全てが彼女に敵わない
彼から産まれた彼女は、その産声を上げた

無邪気は、時に悪意を上回る

純粹は、時に全てを上書きする

その眩しさは、目を眩ませる

そう

誰もが目を背ける程に黒い毛の彼女は真っ白だった

一週間の道のり 三日目 夜（後書き）

狼牙の心理状態

男性↓私

女性↓妾

?? ↓ワタシ

読みは一括して、『わたし』

矢張りまだ甘い気がする。

彼女の狂気には程遠い

一週間の道のり 四日目

昨日の日暮れに着いた村、ここが、出雲までにある最後の村であり後は未整備の道に行く。

そのため、今日一日、買い物を済ませたら各々自由に過ごすことを提案した。

「……という訳で、今から自由行動だ。

この部屋で休むもよし、買い物に行くもよし、夜まで好きにする
といい」

きつと、二人は村に出かけると踏んでの提案だった。

そして、俺はその間に後回しにしていた訓練を一人でしょうと思
っていたのだが……。

「竜牙さん」

狼牙が少し機嫌が悪そうに言う。

「何だ？」

「……出来るんですか？」

カラダが硬直した。

暴露している、間違いなく。俺の考えは暴露している。

「……」

黒い瞳がジッとこちらを見つめてくる。

それに耐えられず顔を逸らす。

「妾に頼ってはくだらないのですね……」

狼牙の悲しげな声が耳に入る。

いや、何故そんなに悲しげな声で言う。

「俺なんぞに構わなくて済むし、麟の相手も出来るのだから。清
々すると思っただが？」

「だとしても、妾が貴方を反故にすると考えたのですか？」

見てみると、狼牙が訴える様な目でこちらを見つめている。

その瞳が、怒りと悲しみに潤んでいる。

俺は、それを取り除くために口を開いた。

「俺の訓練に付き合わせてもいいのか？」

「もちろんです」

効果はあったようだ。

狼牙の笑顔と答えにより、この問題は解決した。

俺は、問題が解決した事と、彼女を悲しませなかった事にホッとした。

ん？何故、俺が彼女が悲しまなかった事にホッとする。

「どうかなさいましたか？」

「いや、何でも無い」

考えたところで理由はわからない。

とりあえず、これは後回しにすることにした。

「それじゃあ、早速だが訓練を始めてくれないか？」

「ええ、始めに講義、次に実践という形でかまいませんね？」

「それで頼む」

狼牙は、では始めさせていただきます。と言い講義を始めた。

「月の石、これ自体は無機物になら何にでもなる事ができます。

これはよろしいですね」

「ああ、実際に天幕や武器には利用した事がある」

質問にこたえる。

それに狼牙は頷いて講義をつづける。

「では、応用です。」

月の石によって作られた道具……貴方はコレをどのように考えますか？」

不思議な質問だが必要なだろう、真剣に考える。

「それは……天幕は天幕、武器は武器だ。月の石によって作られ

た物として見ている」

その答えに首を横に振る。

そして、少し強調して告げた。

「それがいけないのです。」

月の石は、どれだけ姿形が変わっても月の石でありつづけます。

そして、月の石は想像する事によって姿を変えているのです」

「つまり、俺は作った道具をその道具として考えている。

そのため、天幕の幕は幕でしかなく、骨組みは骨組みでしかない。

何故なら、俺がそう認識しているから」

合点がいった。

狼牙は、大きく頷き顔を綻ばせる。

「そのとおりです。」

その様子ですと答えもわかりましたね。

早速、試してみましよう」

「そうしてみる」

俺は、懷から月の石を取り出して小さな刀に変化させる。

そして、刀を月の石であると考えながら。もう一つの刀が持ち手

から分離するように出てくる事を想像する。

持ち手からゆっくりと、もう一つの持ち手が生えてくる。

ソレを掴み、引きずり出すと……。

「上手くいったな」

両手に同じ刀が握られた。

「初めてにしては、上出来ですね」

狼牙に誉められた。

何となく、気恥ずかしいが悪くはない。

「ありがとう、君のおかげだ」

「いいえ、それほどでもありません」

謙遜する彼女の顔には、笑みが浮かんでいる。

「思っていたよりも、早く終わりましたね。これからどうしますか？」

彼女は表情を戻し、提案する。

それを少し残念に思う自分に驚いたが、
気どられない様に振る舞う。

「好きなようにするといい。」

俺はもう少しここで、訓練をしている」

「そうですか。」

では、妾と麟は村を見えます」

彼女が立ち上がると麟もそれにつられて立ち上がる。

「気をつけて、行ってこい」

「もちろん。お土産を買ってきますから楽しみに」

そう言って二人は座敷から出て行った。

「さて、必要なのは速さと量か？」

いや違う、まずは月の石に限界が無い事を認識する事だな」

そして、夜に帰ってきた二人が見たのは座敷を埋め尽くす無数の

物品とそれに埋れている俺の姿だった。

一週間の道のり 四日目（後書き）

一週間の道のり 四日目 夜

日が沈んで間もなく、雲一つ無い見事な夜空の下、とある宿屋の一室にカミナリが落ちた。

「何をしているのですか！」

まったく、まるで新しいオモチャを手に入れた子供のように見境無く物を作った挙句それに埋れるだなんて！

妾は、そんな事をさせるために教えた訳ではありません！」

ガミガミと小言は続く。

その発生源は、一人の狼女。

彼女の顔の上顎から背中にかけて艶のある黒い毛に覆われている。顔の下顎から腹にかけては黒に近い灰色の毛が覆っている。その大半は衣服に隠されているが。

そして、叱られているのは仁王立ちしている彼女の前に正座をさせられている竜人の男。

彼は爬虫類の顔を尖らした様な突起に顔と背中全体を覆う赤い鱗を持ち、手の指は四本ある。

しかし、腹部には鱗は無く保護しているのは衣服のみである。

そして、今はきまりの悪さから彼女を直視できず背を曲げて俯いている。

「……聞いているのですか竜牙さん！」

「ハイ！」

彼こと竜牙は背筋を伸ばして応えた。

「もう、こんな事はしませんね？」

彼女が尋ねるように問うが。そこには、拒否する事を許さない迫力があつた。

「絶対にいたしません」

竜牙の言葉に彼女が頷く。

「今回はここまでにしましょう」

「ありがとうございます」

既に限界なのだろう、竜牙の声は喜びにみちていた。

直ぐに彼は、正座を解き足を揉みほぐし始めた。

「反省もしたようですし、約束通りお土産をあげましょう」

ハイどうぞ、と彼女が彼に何かを手渡した。

「ありがとうございます……それでコレは何だ？」

彼に渡されたのは、黒い鉱物で出来た短い円柱形の棒。

「ふふふ、コレはですねえ。槍なんですよ」

楽しそうに笑いながら彼女は言う。

「コレが槍？ そうは見えないが」

竜牙は黒い石、もとい槍を手で弄ぶ。

うむ、どう見てもただの石だ。

「まあ、持っていて下さいな。きっと何時か役に立ちますから」

「……まあ、折角の土産だ。有難く頂戴するよ」

そうして彼は、槍を懐にしまった。

少しの間、会話が途切れる。

竜牙が、口を開いた。

「そう言えば、村はどうだったかな？ 君も麟も楽しめたか？」

「ええ、とっても。麟も楽しんでいましたよ」

「それは、重畳。よければ教えてもらえないかな？ 村での出来事を」

「もちろん、構いませんよ」

では、本日の出来事を語らせていただきます。

そう言って、彼女の語りが始まる。

一週間の道のり 四日目 昼 狼牙語り

青空と太陽と白い雲、周りには背の低い日本家屋が目に入る。

村の雰囲気を感じるに人間の関係も良好そうだ。

こちらの日本だけあって、帯刀している者や鬚を結っている者もいる。

住んでいる獣人は、猫や犬に鹿や狐等。しかし、この国にいる獣人は日本に生息している動物だけだと思われる。

けれども、毛無ししかいない世界出身の麟には新鮮な風景だろう。そう思い、手を繋いでいる麟を見る。

「さて、こちらに来てから二人で村に出るのは初めてですね」

「うん」

「ふふ、折角ですから存分に楽しみましょうね」

感情を出すのが苦手な麟の表情は乏しい。

けれども、妾には村を楽しみにしているように思えた。

可愛いらしい娘だ。

頭を撫でてしまう。麟は目を細める、嬉しいようだ。

「……お母さん」

恥ずかしさを含む声で言う。

妾はそれが嬉しくて麟を抱きしめた。

「ええ、妾はお母さんですよ」

ああ、本当に可愛いらしい。何時までも抱きしめていられそう。けど、ここは往来ほどほどにしなければいけない。

抱擁から麟を解放し、手を繋いで歩く。

麟は名残惜しそうだったが……我慢してもらうしかない。

二人ぶらりと、村を歩く。

本屋を覗き、武器屋を冷やかし、茶店でお茶と団子をいただき、そして……。

公園に着いた。

遊具なんて物は無く、木に囲まれた大きな広場という印象を持つ公園。

それでも子供達は、追いかけてこや、かくれんぼ、かごめかごめに、竹とんぼや凧を飛ばしたり、楽しそうに遊んでいる。

そして、それを見ている両親も……。

「麟」

妾が呼ぶとこちらを向いた。

「素敵でしょ」

妾の言葉に、麟は楽しげに笑う親子を見て、頷いた。

「麟……お父さん欲しくありませんか？」

それに麟は、頷いた。

「竜牙さんなんてどうでしょう？」

これには、麟は少し首を傾げた。

「あら、彼と決めるにはまだ早いと思いますか？」

妾は、彼ならきつと、妾のこと、そして貴女のこととも理解してくれると思ったのですが」

「……わからない」

麟の言葉、それを妾は残念だと感じた。

「彼も独りなんですよ」

それに麟は、首を横に振る。

「今は彼自身が望んでる」

そうだ。今は、彼がそれを望んでいる。復讐が済むまで幸せになれないと。幸せになつてはいけなさと決めつけている。

「では、早く終わらせましょう」

「うん」

そのためにも……。

「貴方は、生け捕りますよ」

広場にいる毛無しの男に告げる。

「……気づいたか」

「宿からずっとつけられていれば嫌でも気づきます」

刀を携え和服を着た男がつけている事には気づいていた。
問題なのは……。

「貴方が、宣教師を始末した方ですね」

迅速に生け捕れるか。

「当たりさ」

男が懐に入り込み切りつけてくる。

後ろに跳んでそれを避ける。

刀は、目の前を二度風いだ。

これは、

「居合ですか」

「そのとおり」

既に刀は鞘に収まっている。

二度の風ぎ、それは切りつけと戻しによるもの。

高速で繰り出されるそれは、斬られたことにも気づけないかもしれない。

「ですが、それだけなら楽勝です」

居合なら、その範囲にはいらなければいい。

そして、こちらには魔法がある。

「……試すかね」

男は焦る事無く構える。

身体から余分な力を抜きしかし、集中は絶やさない理想的な状態。
かなりの使い手である。

だが、妾より格下だ。

妾は、広場の草を操り男を縛ることにした。

地中の根を男の足元に移動させ、縛り上げた。

「無駄だな」

その言葉と同時に、男を縛り上げていた根が拘束を解き地中に戻っていった。

「なるほど、魔法は効かないみたいですね」

「驚かないのだな」

「別に、自分の弱点に対策を立てただけでしょう」

驚く意味などありはしない。

男が研鑽を積む者なだけなのだから。

「ほう、ではどうする」

戦いを楽しんでいるのだろう、その声は期待に富んでいた。

「別に、ただ捕まえるだけです」

地面を足で強く踏みつける。

途端、地面が盛り上がり男をドーム状に囲んだ。

「密閉空間ですから、気絶するまで閉じ込めさせていただきます」

まあ、聞こえないでしょうけど。

「面白いな、しかし足りん」

中から男の声が聞こえ、ドームが崩れる。

「拙者を閉ざすにはな」

そこには、刀ではなく槍を持った男がいた。

「貴方の得物は、その刀では？」

男の腰には刀がある。

しかし、槍はどこから……。

「流石にわからぬか」

口角を上げて男が笑う。

「それが魔法を無効にしていること以外はですが、それだけわかれば十分。」

詳しくは、捕まえてから聞きますよ」

敵の得物は刀と槍。

そして、槍には魔法を無効にする能力がある。

だが、刀はただの刀に過ぎない。

戦術は決まった。

男に向かって走る。

男は、槍を放り刀に手をかける。

圏内だ。

首を刈る白刃、妾はそれを念動魔法で止めた。

「なん……だと」

驚く男その顔を……、

「死なないでくださいな」

殴り抜ける。

顔が潰れる音を立てて吹き飛ぶ。

地面を三、四回転がって止まる。

男は、動かなくなった。

「こうなるから、魔法で片付けたかったんですけどね」

毛無しにしては速い、しかし獣人にとっては視認できる速さではない。

「スペック低いと大変ですね」

とりあえず、男には月の石で作った手錠をかけて放置。

それよりも槍が気になる。

「あの槍、もしかしたら月の石と似ているかもしれませんが」
落ちたと思われる場所に行くと、槍の姿は無く代わりに黒い円柱状の石があった。

それを握り、身体と繋がる様にイメージすると……。

「やつぱり」

男の槍とは違い、先端から火が出ている槍が現れた。

「おそらく、その人物に合った性質に変化するのでしょうか？」
身体から離すと槍は黒い石に戻った。

試しに麟に持たせてみると、雷の槍と化した。

「どうやら、正解みたいですね」

槍を返して貰い、懐にしまう。

「さて、後は侍から話を聞くだけ」

気絶している男の腹を蹴飛ばす。

男は起きない。

「麟、起こしてやりなさい」

それを聞いた麟は、無言で男に駆け寄り。電気を流した。

途端に、男の身体は痙攣により跳ね上がる。

見ると、痛みで顔を顰めている。

「起きたようですね。なら、知っていることを全て吐きなさい」

「誰が、答える、ガフツ」

殴る。

「これから、三秒毎に貴方を殴ります。もちろん、喋るまで」

「屈する、もの、ガフツ」

殴る。

「今に、神罰が、ガフツ」

殴る。

「……、……、……」

殴る。しかし反応が無い。

気絶したようだ。

「鱗」

それだけで、鱗は男に電気を流す。

「ヒュウ、ハアハア、ガフツ」

殴る。

「わかった、喋るから、やめてくれ」

殴る寸前で止めた。

「俺は、亜人との諍いで島流しに合ったんだ。それで、大陸の教会に助けられて、教えに感化されたんだ。

何か役に立ちたいと思った矢先、倭に宣教するって聞いた。それで、俺はそれに着いて来たんだ」

「それで」

「それで、そんな時頼まれたんだ」

「何を」

「教祖様直々に……」

「裏切り者の抹殺をね」

声が聞こえた、それと同時に男から槍が生えた。

その場から後ろに跳び周りを見渡すが鱗と串刺しになった男しか

いない。

「姿を現しなさい」

最早、公園には誰もいない。

日は、すでに落ちかけている。

このまま夜が来れば、不味いことになる。

「麟、逃げますよ」

麟の手をとり宿屋へと走る。

途中、竜牙さんにお土産を買っていないことを思い出したが、それは、槍を上げることにした。

そして、座敷の中で埋まっていた竜牙を見つけた。

「というわけで、明日からは、何かから狙われることになりそうです」

肩を竦めて言ってみる。

「そんな、ちよつとした事みたいに言っな。結構な大事だから」

竜牙さんは呆れたようだ。

しかし、妾にはそんな事よりもっと重要な事がある。

「竜牙さん」

「なんだ」

妾の真剣な声に彼は居ずまいを正す。

「教団が無くなれば、妾たちに付き合ってくださいなのですよね？」

「付き合うとは……ああ、家族ごつこのことか」

家族ごつこ……。

その言葉に少し悲しくなった。

所詮、遊びなのだろうか。

「構わない、あれは俺も少しばかり嬉しいかったからな」

「えっ」

今、彼はなんと言ったのでしょうか。

嬉しかった。

妾は思わず驚きの声を上げてしまった。

「なんだ、違うのか」

「そ、そんなことはありません。それです、家族ごっこです」
ああ、彼も嬉しく思ってくれていた。

今は、それだけでも構わない。

「妾と麟の気が済むまで付き合ってもらいますからね」
妾は自身の頬を緩ませて言った。

「承知した。明日は早い、それに敵もいる。もう眠ろう」
「はい」

座敷に三枚の布団を敷く、麟を間に挟んで川の字を作り。
今は嘘だけだ。

「おやすみなさい、麟、竜牙さん」

きつと何時か

「おやすみ」

本当になる

「おやすみ」

幸せな夢を……。

一週間の道のり 五日目

日の光すら阻む森の中、走る二つの影

一つは逃げるように、もう一つはそれを追うように。

「まだついてくるか」

逃げる影、竜牙は言う。

「……」

追ってくるのは覆面をした黒い男。

すでに一時間は追われている。

普通の毛無しなら、竜人を十分も追うことは出来ない。

「とにかく、広いところに……」

これ以上追われるのは不味い、そう思い迎え撃つことを決めた矢先、竜牙の目に光が入る。

「しめた、ここなら」

森の中にできた開けた場所、背の低い草ばかりの草原で足を止めた。

月の石を手に取り、二つの青竜刀に変化させ構える。

右半身を前に出して腰を落とす。

それだけで、鱗に覆われた身体は城壁を思わせた。

しかし……肝心の敵が現れない。

引いたのか？

そう思い、少し気を抜いた瞬間。

足元から槍が生えてきた。

「なっ？」

後ろに跳び間一髪で避ける。

背後なら鱗があるが腹部にはそれが無い。

これは、厄介だな。

追われている時には使われなかったことを考えると、目標の視認または、生やす地点を固定する必要があるのだろう。

森に入るべきか。

どちらにせよ、開けた場所は不利になる。

竜牙は、後ろを向き森に向かって走るが……。

「なぜ、進まない」

走れども走れども、森に近くことはできない。

この草原自体がトラップだったのか。

観察してみると、草原は円く広がっている。

円周の地面には、森側だけ閉じていない六芒星が描かれている。

「チツ、誘い込みの魔術か」

異教の神すら封じるこの魔術、出るには術者の許可か排除が必要だ。

しかし、術者が見当たらない今、逃げることはできない。

となると、竜の息による焼き討ちなら勝機があるかもしれない。

「やってみるか」

走りながら跳び上がる、今回は竜人なので、身体の変化は直ぐに終った。

何せ、首が伸びて身体がデカくなるだけなのだから。

空中変身をすませた竜牙は、羽撃き空高くに浮かんだ。

そして、辺り一面に可燃性の液を吹きかけて、「ショウドトカセ」
歯を合わせた。

カチツという音と共に口から火花が散る。それは液体に引火して
爆発を起こした。

空気が揺れる音と共に、地面が吹き飛び土埃が舞う。

そして、土埃は竜牙すら隠した。

「コレナラバ、ヤツモ、タダデハ、スムマイ」

排除を確信できる規模の爆発だった。

だから、竜牙は油断した。

「ナ、ナニ？」

背後から翼幕を破り抜けていく槍、バランスを崩し地面へと落下
していく竜牙に次々と槍が襲いかかる。

「キエチャエ」

力チツと齒を合わせた。

爆発。

その爆風は、竜牙に刺さっている槍を吹き飛ばし、地面から解放した。

しかし、負った傷は深い。

竜の巨体では不利になると判断し、竜人に戻る。

穴だらけの身体、それを隠す衣服も無く、血は垂れ流し。

当てずっぽうで生えてくる槍に怯えながら、ドームの端まで辿り着き、座り込む。

「く、そお、な、んて、情け、な、い」

愚痴すら満足に吐けない。

何か打開策はないだろうか？

考えてみる。

考えろ、考えるんだ。

「まあ、持っていて下さいな。きっと何時か役に立ちますから」

「あつ」

そうだ、槍があつた。

懷から、黒い円柱状の石を取り出す。

「使い方は、月の石と同じと言っていたな」

血を流し過ぎたのか、頭がはつきりとしなない。

考えを口にださないと忘れてしまいそうだ。

「気を流し込むように、石に集中して……よし」

手の内からは、石が消え、その代わりに槍があつた。

槍の穂先は黒い炎で、できていた。

だが、使い方は分からない。

「ダメじゃないか」

ハハッ、どうせならコイツが勝手にアイツを倒せばいいのに……。

投げやりにそう考えた。

途端、槍が手元を抜けた。

「アッ、おい、どこにいくんだ」

槍は、ドームの中央に飛び、そこで回ると、ある一点を刺して止まった。

「……なんだ、まさか本当に行くのか？」

面白半分に、その方向の壁を失くしてみると。

槍は、ドームから勢いよくでていった。

「嘘だろ」

数分後、地面から生えてくる槍が止まった。

その数分後には、槍が手元に帰ってきた。

「ハハッ、呆気ないな」

拍子抜けな決着である。

ドームを崩し、月の石を回収して森に入る。

追手を撒くために別れた狼牙に礼を言わなければ。

「君のおかげで生き残れた」

一週間の道のり 五日目（後書き）

一週間の道のり 五日目 狼牙

「君のおかげで生き残れた」

その言葉は、森の中に隠れていた妾の耳に入った。

「麟、麟、きましたか？」

今、妾、竜牙さんに感謝されましたよ」

側に居た麟を抱きしめて、ばれない程度にはしゃぐ。

本当なら竜牙さんに駆け寄りたいところだけれど、今はガマンしなくてはならない。

「彼を強化するのは、今しか無い」

追手を倒す事はできたようですが、満身創痍。

こんな実力ではとうてい、大陸での戦いで生き残る事はできないでしょう。

時間の無い状況と単独行動を余儀なくされた今こそ、妾が彼を実戦的に鍛えるチャンス。

「フッフ、今の内に休んでおきなさい。夜は長くなりますから…

…」

どれくらい強くなるかは、妾と彼にかかっている。

仕掛けるのは、今晚から。

明日は、間を空けて何回も。

明後日は、出雲の直前で待ち伏せる。

「完璧な配分です」

「ねえ」

自画自賛をしていると麟が話しかけてきた。

「どうかなさいました？麟」

「行っちゃう」

麟の指した方を見ると、竜牙さんが森に入っていくのが見えた。

「……まあ、臭いを辿れば大丈夫です。先に、槍を回収しましょう」

辺りを漂う焼けた肉の臭いを辿り、焼死体を見つける。そして、死体の手から槍を回収した。

「これがあれば、教団の人間になりすませますからね」
槍を懐にいれて、開けた場所まで戻る。

辺りに充満している彼の血の匂いを甘く感じた。
もっと深く味わいたくなり、深呼吸をすると、

「あら」

腰が砕けてしまい、その場に座り込んだ。

「大丈夫？」

座り込んだ妾を心配して麟が声をかけてくる。

「ンツ、立てそうにないです」

力を入れてみるが駄目だった。

それを見かねた麟は月の石を飲み込み姿を変えた。

体表を白い鱗に覆われた一角の馬、麟がそこに現れた。

麟は膝を折り、体高を低くした。

「乗れる？」

妾は、腕の力だけでなんとか、麟の背に乗ることができた。

「ありがとう、麟」

「……指示をお願い」

顔を下に向けて照れているようだ。

そこがまた、可愛いらしい。

「フフ、それでは行きましょう」

妾達は、竜牙さんを追って森に入っていく。

「期待しますよ、竜牙さん」

一週間の道のり 五日目 夜

夜空には星が煌き、夜道を月が照らす。

けれども、森の中にその光が入ることは無く、深い闇が広がるばかり。

そんな闇の中を歩く赤い影、暗い赤色の鱗を持つ竜人、竜牙だ。日中の戦いによる傷はある程度癒えたのか、ふらつくこともない。ボロボロになった衣服の代わりに今は、月の石で作った衣服を着ている。

もちろん、ただの衣服ではない。

鎧の強靱さと羽の軽さを想像して作られている。

始めからこうしておけば良かった。と思わずにはいられない出来であった。

「……二人は無事だろうか」

追手は片付けたが、もしかしたらまだ敵はいるかもしれない。

だとしたら、夜が一番危ない。

暗がりを警戒しながらも、歩きつづける。

土を踏む音がいつもより大きく感じる。

草木のざわめきに振り向きながらも、前に、前に。

幾らの時間が過ぎただろうか、月の見えない空は語らない。

どれ程の距離を歩いただろうか、暗闇に隠れた道のりは語らない。

自分が存外臆病だと知り、縊るものを欲した。

ああ、早く行かないと……。

歩を進める。

その時、暗がりから何かが飛来した。

衣服に当たり、鉄を弾く音が鳴る。

服越しの感触からそれが突起物であることも……。

「誰だ！」

それに対する答えは、更なる攻撃。

風を切る音から離れるように跳んで避ける。

通り過ぎる音が聞こえたが、その正体はわからない。

しかし、攻撃は止まない。

一撃ずつが二撃に、二撃が三撃に、まるで試すように増えていく。

次第に避けるのが難しくなり、何時しか剣を両手に弾いていた。

一瞬、ドームを作ることも考えたが先の戦いを思い出しやめた。

槍ならいけるだろうか？

地面に刀を突き立て壁に変えることで攻撃を凌ぐ、その間に懐か

ら槍を取り出し、

「行け！」

投げた。

槍は敵のいるであろう方角に進み、森の中へ……。

暗い森を炎の槍が照らす。

そして、敵の姿を目視した。

「見つけたぞ！」

目以外を黒服に包んだ毛無し。それが敵の正体だった。

敵は、おそらく投げつけるための苦無で槍を弾き、肉薄してきた。

「なっ！」

一瞬で距離を詰められた。

敵は苦無を尻ぐ、狙いは首だ。

竜牙は上半身を反らしてそれを避け、地面を蹴り後転。

敵の顎先を蹴り上げる。

仕留めたか？

着地をして前をみる。

敵は……。

「いない、どこにいった」

一瞬で消えた。

周りを見回すも、また暗い森ばかり。

手元に戻った槍を放るが、落ちるだけ。
退いたか？

槍を懷に戻し。月の石を握る。
気を少し緩めると、目の前に黒い火が飛び込んできた。

「なっ」

竜である竜牙に火は効かないだが、これは避けなくてはいけない
と感じた。

「ウオオオオ！」

横に転がり避ける。

しかし、火は方向を変えてこちらに来る。

「追尾だとオ！」

同じ能力を持つのは俺の槍、となるとこれは槍なのかもしれない。
モノは試しと青竜刀を作り切りつけると、金属音が鳴り、火を弾
いた。

「やはり、槍か」

槍は地面に落ちる。

途端、後ろから拍手が聞こえてくる。

振り向くと敵がいた。

「よくぞ、よくぞ、生き残れました。」

けれども、これは序の口、宵の口、まだまだ続けたいところ、で、
す、が、本日はここまで。では、また明日」

「待てっ！」

しかし、敵を逃がしてしまった。

だが、声の質からおそらく女ということとは分かった。
肉弾戦に持ち込めば勝てるかもしれない。

「いや、勝つしかない」

不退転の決意を胸に、暗い森を歩む。

敵の言うことを信頼することはできない。

おそらく、夜通しになるだろう。

出雲まであと少し、旅はまだ始まったばかりだ。

一週間の道のり 六日目 朝（前書き）

グロ注意？

まだ、甘いよね

一週間の道のり 六日目 朝

歩き続けていると、森全体に湿り気を帯びた空気が充満していく。いつしか、それは空気を霞ませていき霧となっていく。

「もう朝か……」

黒服は結局、現れなかった。

あの言葉を信じるとしたら今日、何時とも分からぬが、襲って来るのだろう。

霧は、段々と濃くなっていく。

黒服も俺を見ることは叶わないだろうが、槍で位置を知るくらいは出来るだろう。

こちらと違い、あちらは槍を熟知しているだろうから。

霧の中、警戒を強くして慎重に歩く。

相変わらず時間は分らない。

それは、ゆっくりと不安を育ててゆく。

木の影に人影を見る。

霧の中に人影を見る。

一人が二人に、二人が三人に増えていく。

見間違いなのだろうか？

気付けば周りから視線を感じる。

監視されている。

草を踏む音に振り向く。

鳥の羽ばたきに転がり。

虫の羽音に殴りつける。

見えない敵の幻像に苛立ち、神経は研ぎ澄まされていく。殺意は収束し、ひたすらに鋭さを増す。

何時しか、懷から槍を取り出していた。

しかし、いつもとは様子が違う。

黒い炎は鋭く尖り穂先を形どった。

柄も無地ではなく、禍々しい意匠となった。

今なら奴が大陸の端にしようと当てられる気がした。

「行け！」

上方に勢いよく投擲する。

槍は、霧を裂き、森に穴を空けて、空へと飛んでいく。

一日振りに日の光を浴びる。

酷く久しぶりな気がした。

「派手過ぎです」

「えっ」

サクリッ、と軽い音。

同時に腹部に走る痛み。

見ると槍で貫かれていた。

槍を持っているのは黒服。

そして、やっと理解した。

ああ、刺されたのだと。

「焦りからの衝動的な行動、下策以外のなにものでもありません
ねッ」

「ガアッ」

ズッ、という音と共に槍は引き抜かれる。

穂先の黒い炎が傷口を焼いていったのだろう。肉の焼ける臭いが
する。

傷の治りは相当遅くなりそうだ。

痛みに倒れそうになるが、なんとか耐える。

「あら、まだ倒れませんか」

黒服は驚きと楽しさが混ざった声でいう。

歯を食い縛り、痛みを押し殺し。薙刀を作り、構える。

「イイわあ、健気に頑張る子。妾は好きよ」

黒服は目を細め、くぐもった笑い声をあげる。

俺は、踏み込み薙刀の刃を上にして逆袈裟に振る。

しかし、槍の柄で防がれてしまう。

「不意打ちだなんて、いけない子」

黒服の笑みが深くなった気がする。

振り抜こうと力を入れるが槍はビクともしない。

こいつ本当に毛無しか？

負傷してるとはいえ、竜人の攻撃を受け流すこともなく平然と防ぐ。

いよいよもって、こいつの得体がしれなくなり恐ろしくなる。

「怯えてるの？可哀想ねえ、温めてあげましょうか」

黒服は槍に力を入れる。

それだけで力の均衡はいとも簡単に崩れ、薙刀が弾かれた。

「なっ！」

それに驚いていると、傷口を蹴り飛ばされ地面に転がる。

「アゲッ」

痛みに悶え、もがき苦しむ。

黒服はそこに近づいてきて、傷口を強く爪先で踏みつけた。

「ギヤアア！」

獣じみた悲鳴を情けなくも上げてしまう。

爪先をグリグリと回し、傷口を抉る。

ニチャニチャと粘着質な音が入る度に走る激痛。

「ーッ！」

声に鳴らない悲鳴、口を陸に上げられた魚の様に開閉して喘ぐ。

黒服はそれを見て口の布をズラす。

そこには、赤らみ緩んだ頬とぷっくりと膨れた紅い唇が隠されていた。

黒服はゆっくりと膝立ちになり、傷口に爪先の代わりに指を突っ込み。馬乗りになる。

始めは人差し指を傷口の奥まで刺し淵をなぞる。

痺れるような痛みが走る度に歯を食い縛る。

次に、人差し指の腹と中指の爪の背で淵をなぞり、偶に肉を穿る。痛みの種類が増える。

偶に走る激痛に叫びそうになる。

そして今度は、一気に拳を傷口に入れた。

「ーッ！」

今まで以上の激痛に舌を突き出してしまふ。

そう、舌を出してしまつたのだ。

黒服のもう一つの手が舌を掴み引つ張る。

「アガッ、ゲッ、ゲッ」

傷口の中で拳が開閉される。

「エッ！エッ！エッ！」

悲鳴を上げたいが舌を掴み出されているので、喘ぐばかり。

黒服の顔は愉悦に満ちていた。

黒服はおもむろに、俺の舌を口に含み、噛みちぎった。

「ギヤアアアアア！ ムゲッ」

叫ぶと顎を抑えられて、口を閉ざされた。

黒服は傷口から拳を引き抜いた。

もがいて拘束から抜けようとしたが叶わなかった。

血濡れた手が視界に入った。

その血を黒服は恍惚とした表情で念入りに舐め取る。

そして、唾液に濡れたその手が顔に近づいてくる。

不幸にもその手が行うことに気づいてしまった。

「ムー！ムー！」

抵抗は虚しく、ゆっくりと近づいてくる。

肌色が視界一杯に広がり……。

又チャ。

プチュ。

グジュ。

ズルツ。

目玉を挟った。

「ムーーーーー!？」

視神経は伸び、目玉は未だに映像を脳に送る。

高価な宝石を見るようにうつとりとした表情で目玉を見つめる黒服の顔が映る。

目玉を目で堪能した黒服は今度は、目玉を舌で堪能するために。

目玉を口に含んだ。

目玉が転がり濡れる感触を味わう二人。

存分に楽しんだ黒服はとうとう、目玉を噛み潰した。

瞳の方から中の液体が零れ出て目玉が萎む。

この時ばかりは竜の頑丈さが憎くなった。

意識を無くして痛みから逃れることも出来ないのであるから。

戦意は喪失し、痛みからの解放を望み始めたその時。

それはやって来た。

「カヒュ」

黒服が突然仰け反った。

その腹からは槍が生えていた。

「今、更、か、よ」

黒服は黒い炎に包まれ焼かれていく。

声すら上げることなく黒服は灰となった。

そして、その灰も一迅の風に運ばれて消えてしまった。

「終わったのか？」

残った片目に太陽の光が入る。

それを見ると酷く安心して。

そのまま意識を失った。

一週間の道のり 六日目 昼

霧が晴れた森の中、風によって散り散りとなった灰は一つに集まる。

そして、その中から一矢纏わぬ狼女が生まれた。

「ハアー、やっぱり化けるのは疲れるものね」

伸びをしながら狼女もとい狼牙がいう。

「あら、口調変えるの忘れてたわ」

深呼吸をし、口調を変える。

「ん、これで元通りですね」

月の石でローブを作り羽織る。

そしてそれを、衣服に変化させた。

黒地に紅い彼岸花の描かれた浴衣。

少しキツイので、襟にゆとりを持たせる。

「もういいですよ。麟」

どこからか、麟が現れる。

「大丈夫？」

演技とはいえ心配したのだろう。

麟の顔には不安があった。

「あれ位どうということもありませんよ」

そう言って麟に笑いかける。

けれども、麟の表情は変わらない。

どうしたのかと思い麟に問う。

「何か気になることがあるの？」

その問いかけに 麟の身体が一瞬、硬直した。

しかし、麟は何も言わず。何かに気づいてほしそうに、妾を見る。

麟を抱きしめてやると、麟は硬直した。

妾に怯えているのだろうか？

妾は麟に問いかける。

「ねえ、麟。言ってくれなければ何もわからないわ。一体何が不安なのか、教えて頂戴」

けれども、麟は腕の中で硬直するばかり。

「ねえ、どうして何も言ってはくれないの？」

答えない麟。

しかし、身体が震えている。

「一体、何に怯えているの？」

麟は答えない。

「どうして答えてくれないの？」

どうして何も言わないの？

一体、何に怯えているの？

答えない！

答えない！

麟！

物言わぬ麟に苛立ち、ヒステリックに叫ぶ。

すると、今まで怯えるばかりだった麟が、妾を突き飛ばした。

突然のことに尻餅をつく。

顔を上げて麟をみると……。

麟は泣いていた。

慰めないと、早く慰めないと。

立ち上がり、近づこうとすると。

麟は妾から離れる。

そして妾を睨みつけて言った。

「貴女は違う」

その言葉の意味は分からない。

けれど、拒絶された事は分かった。

「サヨナラ」

それだけ言って麟は何処かへ行ってしまった。

妾はそれを追えなかった。

追っても戻る事は無いと気づいているから。

私は妾にゆつくりと侵食されている。

その事実気づかされたから。

「貴女は違う」

私は妾で違いないと思っていた。

コレは肉体の変化でしか無いと思い込んでいた。

思おうとしていた。

そうする事で、変貌するワタシを無視していた。

薄々感づいてはいた。

力を楽しむ感覚。

孤独への不安。

残虐性の増大。

歯止めの効かない心。

そして、家族への依存。

「大丈夫？」

麟もとうとう放置出来ないと、判断したから言ったのだ。

けれど、遅かった。

私はもう欠片程しか無い。

たったの三日でこれだ。

明日にはもう、私は妾に変わりきるだろう。

麟に愛想を尽かされたと知った妾は何をするのだろうか？

大体の見当はついていてる。

きつと、彼を求めるのだろう。

結末は分からないが、そこに幸せはあるのだろうか？

微睡みが私を襲う。

次に目覚めた時には、妾だけになるのだろう。

ならば祈ろう。

「妾に幸あれ」

暗転する世界。

倒れる身体。

全ては暗い森に隠された。

一週間の道のり 六日目 昼（後書き）

一週間の道のり 六日目 夜

霞がかつたようにぼんやりとした気持ち。

そんな気持ちで空を駆ける。

私は結局、母を守れなかった。

それどころか、逃げてしまった。

変貌し狂ってゆく母を見て、恐ろしくなった。

竜の血肉を喰らい、恍惚とした表情を浮かべるアレを母と信じた
くなかった。

人の状態だからあの程度で済んだのだ。

もし、狼人だったら……。

考えるのはやめておこう。

始めの内は、母さんだったし、アレの片鱗が少しあっただけだ。

三日目の夜には、一時的になり切りだして。

四日目には、半ば混じっていた。

五日目には、少し暴力的だけど竜を鍛えるのが目的だった。

だけど今日は違う、間違いなく竜を殺す気でいた。

母さんを信じていたから、母さんが何とかできるからと、言うて
たから。

待ってしまった。

アレは、直ぐに消すべきだったのに……。

空はイヤになるくらい澄んでいて、星の光が私を苛む。

「ゴメンなさい」

優しい母さんを守れなかった。

私は、悪い子だ。

助けられてばかりで何も返していない。

私は一体何を望んでいたのか？

母さんの幸せなのに。

気付けばいない。

私では救えない。

なら、頼るしかない。

母さんが言うには出雲に神が居ると言っていた。

きつと助ける術を知っているに違いない。

けれど、もし無かつたら……。

その時は、私の手で。

決意を胸に空を強く蹴る。

目的地は出雲。

全てを清算するために……。

時は少し遡り、森の中。

もう日が沈む頃。

「……寝過ごした」

竜牙が目を覚ました。

身体を触り、傷の状態を診る。

腹の傷は既に塞がっているが、目が復活するにはもう少しかかり

そうだ。

身体は良い、問題なのは時間だ。

余裕を持つて見当をつけていた一週間という期間。

このままだとそれに間に合わない。

「少しノンビリし過ぎたな」

あの二人と居る時間が心地よくて。つい、長引かせてしまった。

「楽しかったなあ」

竜の十六歳、本当なら遊びたい盛りだ。

奪われた時間を思い出させてくれた。

あの二人には感謝している。

だからこそ、これ以上巻き込めない。

「少し怖いな」

出雲を前にして、逃げたくなった。

死にかけて、生きたくなった。

もつと、二人と過ごしたい。

もつと、生きていきたい。

生きることへの欲。

俺は、それを忘れていた。

だからこそ、行くと決めた。

「幸せになるんだ」

全部終わらせて、生きて二人の所に行こう。

もう、復讐だけじゃない。

幸せになるために、過去を清算するんだ。

「急ごう」

二人より先に出雲に行つて、明日は二人と過ごして再会を約束しよう。

大陸の教団がどれ程強くても、負ける気なんてない。

何せ俺には負けられない理由があるのだから。

竜に変化する。

同時に、何かが変わった気がする。

「イクゾ」

翼を広げて、何時もより綺麗な夜空へと、飛び立つ。

目標は出雲。

世界を楽しむようにゆつくりと飛ぶ。

「アア、セカイハ、カクモ、ウツクシイ」

気持ち一つで世界がこうも変わるとは……。

感動していると、馬の蹄が地面を蹴る音が後ろから聞こえてきた。

振り向くと一匹の麒麟がいた。

「キリン、トハ、メズラシイ」

急いでいるのか、相当な速さで近づいてくる。

ん？近づいてくる。

よくよく見てみると、麒麟は目を瞑っていた。

「マサカ」

顔の鱗が青色に変色した気がするくらい、血が下がる。
麒麟は間違いなく、こっちに向かってきている。

「オイ！」

怒鳴るが麒麟は止まるどころか、気づきもしない。
それどころか……。

「ナニヲ」

微弱な電気のラインを直線状に引く。

魔力の質から負と正が交互になっていることが分かった。
嫌な予感がする。

麒麟が足に電気を纏った。

右と左の足に負と正の電気が……。

右足が正の電気を踏むと弾かれたように前に飛び出る。
相当な負担が掛かる行為だ。

俺は麒麟の身を案じてしまった。

「ムチャダ、ヨセ」

しかし麒麟は止まらない。

それを繰り返す度にどんどんと速くなる。

このままだと不味いことになる。

麒麟を止める為に、構える。

踏ん張りの効かない空中で随分な無茶をするものだと考えるが。
麟と同じ麒麟を見捨てたくはなかった。

「トマレ！」

その言葉に麒麟は止まる事なく走り続けて……。

俺に直撃した。

麒麟の角が深々と腹に刺さる。

想像以上の強さで吹き飛ばされそうになったが何とか耐えた。
麒麟をしっかりと抱きとめる。

麒麟もそれには気づいたのか、足を止めた。

「フウ、イツタイ、ナニヲ、イソイデ、イル？」

腕の中にいる麒麟に問う。

麒麟は震えているようだ。

落ち着かせる為に頭を撫でてやる。

「どうして？」

頭に麟の声が響く。

となると……。

「オマエハ、リン、ナノカ」

「うん」

見てみると、麒麟の顔には確かに麟の面影があった。

「ロウガハ、ドウシタ？ イツシヨジャ、ナイノカ？」

問うと、麟は目から涙を流した。

一体、どうしたのだろうか？

「マサカ、テキニ、ヤラレタノカ！」

「違う」

角を腹から引き抜き、首を横に振る麟。

「ヤラレテハ、イナイノダナ」

俺は答えに安堵する。

しかし、麟は俯き悲しんでいる。

狼牙はこういう時、麟に何をしていただろう？

確か、抱きしめていた。

思い出した俺は、それを実行する。

キツくしないように、怯えさせないように、優しく、そっと、け

れど強く抱きしめる。

「カナシムナ。

オレガ、イル。

ダカラ、タヨレ。

オレハ、ミカタダ」

麟の震えが止まる。

そして、俯いていた顔を上げた。

その瞳には哀しみがあつた。

「お母さんが、壊れたの」

その一言を皮切りに狼牙の事を話す麟。

その話によれば、女になつたせいで壊れてしまい、それを治す手が出雲にあるかもしれない。とのことだった。

「ソウカ、ソンナコトニ、ナツテイタノカ」

「私は守れなかった」

語り終えた麟は不安と哀しみで再び俯いてしまった。

そんな麟の頭を撫でて励ます。

「アンズルナ、アレハ、ツヨイ」

「どうして、そんなことが言えるの」

意気消沈とした声。

「アレハ、オマエノ、ハハダ。アレガ、オマエヲ、オイテ、ユク

ワケガ、ナイ」

「そうかな」

少し明るくなった声。

「キット、カエツテクル」

「少しだけ、信じてみる」

多少は元気を取り戻せたようだ。

麟の顔に精力が戻る。

さつきまでの消沈としている様は見えていらなかった。

俺も今まではあんな顔をして生きていたのだな。

希望も無く、過去ばかりに囚われたその姿は、まさしく亡霊であつた。

けれど、今は違う。

「リン、オレニハ、ユメガ、デキタ」

麟が顔を上げてこちらを見る。

だから、高らかに宣言しよう。

「オマエト、ロウガガ、ユルスナラ、オレモ、カゾクニ、シテホ

「シイ」

鱗の目が見開かれる。

鱗を見据えて、俺は宣言する。

「ソノタメニモ、ロウガヲ、タスケルゾ。フタリデ」

「うん」

腹を据え、二人は出雲へと向かう。

狼牙を救う為に……。

深く、暗く、全てが溶けた闇の中でソレは起きた。

「……」

ソレの瞳からはとめどなく涙が流れている。

「……」

慟哭する気力も無く、ただただ、涙を流すばかり。

「……」

ソレの心は哀しみと怒りと恐怖で満ちていた。

「……」

ゆらりと立ち上がる、その様は正に幽鬼であった。

「……」

ソレは大事な者に捨てられたと思っている。

「……」

ソレは愛したと思っている。

「……」

けれど、本当は違う。

「……」

ソレは愛されたかっただけなのだ。

「……」

絶望にまみれたソレの頭に一つの人物が浮かんだ。

「彼なら、妾を愛してくれるかしら……。」

ソレは出雲へと歩き出す。

ただただ、愛されることを夢見て。

一匹の狼は番いを求めて彷徨うのだ。

一週間の道のり 六日目 夜（後書き）

次回、シリアスがシリアスじゃなくなるかもしれません。
私にもわかりませんから。

一週間の道のり 最終日 朝（前書き）

大変、このシリ阿斯、息してない。

一週間の道のり 最終日 朝

森を抜けると、其処は神の村だった。

立ち並ぶ巨大な建物、その中央には赤い塔。

「何なのだ、これは！ どうすればいいのだ!？」

「どうしたの」

麟の問いかけに正気に戻る。

「イヤ、ナゼカ、イワナイト、ナラヌ、キガシテナ」

頭の中に赤い竜と騎士の姿が浮かんだような気がした。

「キニスルナ」

「そう」

麟は納得して村を見ている。

俺もこの事は考えないようにしよう。

村の近くまで飛び、少し開けた所に降りる。

そこで変化して、竜人に戻る。

「さて、出雲は目の前なんだが……」

言葉を途切り身構える。

「どうしたの」

麟が問いかけてくる。

「何か近づいてきている」

その応えに、麟も身構えた。

辺りを警戒する。

村の方から、物音が聞こえる。

その音は段々と近づいてきている。

来るか。

一体、何が来るのか。

集中していると。

「ワア!!」

「ヒヤ!!」

後ろから耳元で叫ばれ、思わず飛び上がる。

こんな事をする奴は一人しかない。

「何をなさるのです!しょ……って、お前は誰だ?」

師匠と思つたら、違う人だった。

「へロオー、君が竜牙君?あつ、別に答えなくていいよあ。麟ち

ゃんいるから間違いなさそうだし」

一息でそいつはこれだけの事を言い、辺りを見回す。

「あゝ、やっぱりウルフ君いないなあ。

となると、バッドエンドフラグ建っちゃった?」

一体こいつは何なのだろうか?

今も訳の分からない言葉を矢継ぎ早に言い続けている。

「いい加減にしろ、さつきから訳の分からん事をペラペラと喋り

おつて。何様のつもりだ」

ジロリと睨むがこいつは気にも止めずに言い放つ。

「何様つて、神様に決まってるじゃん」

お前、何言ってるの?と言わんばかりの視線で俺を見てくる。

「まあ、良いや。ようこそ、出雲へ。

君の事はロキ氏から聞いているよ」

乾いた拍手を打ちながら、こいつは言った。

「君は、天照大神に会いに来たんだよね。一応、この村の中央

にある塔の展望台に居るから行って来たら。

麟ちゃんは、僕に任せて良いよ」

さつさと行けと、手まで振りおる。

それを見て、堪忍袋の緒が切れた。

「貴様、本当に何様のつもり何だ!」

「ええゝ、逆ギレエ。無いわあ、それ人に物聞く態度じゃ無いわ

あ」

ひょうきんなこいつの態度に嫌気がさし、掴みかかろうとするが。

「ダメ」

麟が俺を羽交い締めにした。

「離すんだ麟、こいつは一発……いや、死ぬまで殴らなければならん！」

「ワアオ、何と言う時間の無駄遣い。」

僕、死なないからその作業終わらないよ。

それと、好い加減にしないと時間無くなっちゃうよ」

「好い加減にするのは、貴様の方だろうが！」

怒鳴りつけてやると、ワザとらしく震えて「怖アゝい」とぬかしやがる。

「殴る、絶対殴る」

麟の拘束から抜けようと足掻く。

そんな俺にこいつは言う。

「僕が狼牙君を戻す方法を知っていても」

俺は足掻くのを辞めた。

その場に動く者はいなくなり、一陣の風が吹き抜けた。

「ちよつとした事なんだ。」

僕達が神様で彼は人間だった。

それだけで、彼は心の隅に孤独を感じていた。

どれ程、愛されても。

何か違う物を求めていた。

一度、僕達と同じ存在にする計画もあったんだけど。

彼自身がちよつとした奇跡と偶然で無しにした」

こいつは一息吐く。

「今回の騒動、その原因はこの月の石だ」

掌から月の石を作り出した。

「君の持っているそれは、ロキ叔父の作った贋作だ。

僕の物より、機能が変わっている。

原因は、僕の月の石にある機能。

僕の教義にある同性愛の禁止を行う装置……性転換の執行だ」

手を置いた頭を横に振る。

「始めはたんなる、イタズラ機能、お茶目装置のつもりだったんだ。」

日の目なんて見る訳ないと思ってた。

なのに、まさかあのウルフ君が使うだなんて！

うう、一体君はウルフ君に何をしたんだ？

まさか、襲ったんじゃないだろうな？」

「俺に男色の気は無い」

ええい、怪訝な顔で見るんじゃない。

「どうせ後で祭りだからな、覚悟しとけよ。」

兎も角、狼牙を治す道具も一応あるのだから……」

そこで、言い淀む。

「じれったい、早く言え」

「お前、後で出雲タワーに串刺してやる。」

それと、道具なんだが……コレ任意作動なんだ」

その一言で空気が凍りついた。

任意作動、つまり狼牙自身にそれを使うか使わないかを決める権限がある。

「いやあ、まさかここまで相性が良いとは……」。

まあ、一番月の石との相性も良かったしあり得なくは無いが。

ハッハッハッ、予想ガイです。何てな……本当にどうしよう」

頭を抱えてしゃがみ込んでいるそいつに言う。

「打つ手は？」

「君が祭りで生き残れないくらい無いよ」

「祭りの内容は」

「君を殺すRPG」

良く分からないが、限りなく低いことだけは確かなようだ。

「参加者は、建御名方神にインドラにエンキドゥ等の戦神や破壊神を始めとし、モリガンやカーリー、セクメト等の女傑系となっております。」

コメントを読んでみましょう。

ヨクモ、イトシゴヲ！！

うっわ、全部これかよ。

ハイ、名簿」

分厚い紙の束を渡される。

随分な重さだ。

「……愛されてるじゃないか」

この重さは彼らの愛と同じなのだろう。

「君の処刑人ばかりだけどね」

「それを言うな」

一言欄には全て、禍々しい文字で同じ事が書いてある。

本当にこんな事になったのを許せないのだろう。

「何だか、娘を嫁に出す気分になったとさ」

にへらつと笑って言われる。

それだけで何だか、憎めない奴だ。

「そうか、なら挨拶に行かないとな」

二人に背を向ける。

そこに面白がるような声が聞こえた。

「何て言うんだい」

「もちろん、娘さんを俺にください。てな」

そう言っただけは歩きだす。

神の村、そこで俺はどんな目に会っただろうか。

竜牙が見えなくなったところ、麟が呟く。

「まだ、プロポーズしてない」
「あー、外堀からになっちまったか」
「台無しである。」

一週間の道のり 最終日 昼（前書き）

繋ぎなので短いです。

一週間の道のり 最終日 昼

村に入った途端に村人全員が俺をにらんできた。
村人同士ひそひそと話だす。

「あいつか？」

「ああ、あいつに違いない」

「ということは」

「そういうことです」

突然、ラッパの音が鳴り響く。

何かをまつように全員の動きが止まる。

その時、天空から声が響いた。

『えゝ、ヘイムダルです。ロキから確認が取れました。入り口に
いるのは罪人、竜牙に違いありません。』

よって只今より、祭りの開催をお知らせいたします。

七度目のラッパの音が鳴ったらスタートです』

プアゝ。

降りそそぐラッパの音。

プアゝゝ。

その美しい響きによいしれそうになる。

プアゝゝゝ。

けれど、今はそんな場合じゃない。

プアゝゝゝゝ。

なんとしてでも生き残らなければ。

プアゝゝゝゝゝ。

腹を据える。

プアゝゝゝゝゝゝ。

『次のラッパが合図です。』

罪人、竜牙、遺言はあるか」

「俺は、生きる。」

生きて狼牙と添い遂げる！」

『よく言った小僧、祭りのはじまりだ！』

プア~~~~~！

迫り来る大軍、俺はその中へと……。

「そこをドケエ〜！」

大鎌を構えて入る。

俺の戦いはこれからだ！！

暗い森の中を彷徨う

見えない明かりを求めた獣は

絶望の内にいる

救いの手を求めて歩き続けていく

その手が側にあると知らずに

見えない明かりを求めて彷徨う。

獣は心に決めている

二度とそれを離す事はしないと

「妾だけ。妾だけを愛してくださいね」

焦点の合わないその瞳が何を見ているのかは、彼女しか知らない。
けれども、結末は訪れる。

日が暮れた、夜の始め。

彼女はとうとう、出雲に着いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1309x/>

竜の詩

2011年11月4日08時08分発行